

猿山 A 遺跡

さるやま住宅団地内発掘調査報告書

昭和 53 年 4 月

栃木県住宅供給公社

栃木県教育委員会

例　　言

1. 本書は栃木県住宅供給公社が建設した住宅団地内で発見された奈良時代～平安時代の集落跡の発掘調査報告書である。
2. 遺跡は宇都宮市さるやま町内に所在し、発掘調査は昭和49年4月25日～7月6日まで74日実施した。
3. 発掘調査費及び報告書作成費は全額栃木県住宅供給公社が負担したものである。
4. 本報告書の作成は遺構の執筆と図面作成を常川秀夫が行ない、出土遺物の執筆と図面作成及び図版（写真）作成を山野井清人が行なったものである。

図 版

- | | | | |
|------|-------------------------------|------|-------------------------------|
| 図版 1 | 東区及び西区全景 | 図版15 | 13号住居址全景（上） |
| 図版 2 | 1号住居址全景（上） | | 14号住居址全景（下） |
| | 2号住居址遺物出土状況（下） | 図版16 | 1号掘立柱建物跡（上） |
| 図版 3 | 2号住居址遺物出土状況 | | 2号掘立柱建物跡（下） |
| 図版 4 | 2号住居址遺物出土状況（上） | 図版17 | 1号井戸跡全景（上） |
| | ※ 全景（下） | | 2号井戸跡遺物出土状況（下） |
| 図版 5 | 3号住居址遺物出土状況 | 図版18 | 2号井戸跡全景（上） |
| 図版 6 | 3号住居址全景（上）、
4号住居址遺物出土状況（下） | | 3号井戸跡全景（下） |
| 図版 7 | 4号住居址遺物出土状況（上） | 図版19 | 4号井戸跡全景（上） |
| | ※ 全景（下） | | 円形周溝遺構全景（下） |
| 図版 8 | 5号住居址全景（上） | 図版20 | 2号、3号住居址出土遺物 |
| | ※ 遺物出土状況（下） | 図版21 | 5号、6号、7号、8号、9号
住居址出土遺物 |
| 図版 9 | 6号住居址全景（上） | 図版22 | 7号、10号、11号住居址出土遺
物 |
| | ※ 遺物出土状況（下） | 図版23 | 2号、3号、6号、7号、9号
住居址出土遺物（底部） |
| 図版10 | 7号住居址全景（上） | 図版24 | 12号住居址出土遺物 |
| | ※ 遺物出土状況（下） | 図版25 | 13号、14号住居址出土遺物 |
| 図版11 | 8号住居址全景（上） | | |
| | 9号住居址遺物出土状況（下） | | |
| 図版12 | 9号住居址全景（上） | | |
| | ※ 遺物出土状況（下） | | |
| 図版13 | 10号住居址全景（上） | | |
| | 11号住居址全景（下） | | |
| 図版14 | 12号住居址遺物出土状況（上） | | |
| | ※ 全景（下） | | |

目 次

例 言

1. 発掘調査の経過	1	頁
2. 遺跡の地理的環境と付近の遺跡	3	頁
3. 遺跡の概要	5	頁
4. 住居址造構と出土遺物	6	頁
1号住居址	6	頁
2号住居址	8	頁
3号住居址	13	頁
4号住居址	16	頁
5号住居址	18	頁
6号住居址	21	頁
7号住居址	24	頁
8号住居址	27	頁
9号住居址	31	頁
10号住居址	34	頁
11号住居址	37	頁
12号住居址	40	頁
13号住居址	44	頁
14号住居址	45	頁
5. その他の遺構と出土遺物	48	頁
1. 掘立柱建物跡	48	頁
1号掘立柱建物跡	48	頁
2号掘立柱建物跡	50	頁
2. 井戸跡	51	頁
1号井戸跡	51	頁
2号井戸跡	52	頁
3号井戸跡	52	頁
4号井戸跡	52	頁
3. 円形周溝遺構	53	頁

1. 発掘調査の経過

本遺跡のある宇都宮市さるやま町は、同市の南東部に位置し沖積地は水田、台地は畑と平地林であり、その中に農家が点在する純農村地帯である。

この地域（さるやま町、下栗町、西剣郎町）の約100ha上地を開発する計画がたてられたのは昭和40年代の前半のことと思われる。その結果、西側は栃木県住宅供給公社がさるやま住宅団地、東側は宇都宮市市街地開発組合が住宅地及び工業用地として開発し、その中間に新4号国道が道路幅約40mで建設されることになったのである。

県教育委員会が同地域の遺跡の実地踏地を実施したのは昭和46年で新4号国道建設用地内を歩いたが大部分が雑木林であったため遺跡は確認されなかった。その後昭和48年5月に宇都宮市市街地開発組合から県上地利用対策委員会に瑞穂野団地開発申請書が提出されたため、60haに及ぶ広大な地域を再び県及び宇都宮市教育委員会が遺跡の調査を行なった結果、広範囲にわたり土師器の散布が確認されるものである。

このため北に隣接する「さるやま住宅団地」も同時に調査を実施した。同団地は既に造成が終り、道路、側溝も完成し、北の地域から住宅の建設が行なわれている段階であったが、南の地域には平地林を整地した際に出土したと思われる、土師器及び須恵器の破片の散乱が確認されたので、県住宅供給公社と県教育委員会の間で遺跡の保存について緊急に協議が行なわれた。

その結果、同団地は既に、造成工事も終了し、分譲価格も決った状態であるので発掘調査を行ない記録保存を計ることになった。発掘調査費は受益者負担の原因を尊重し、全額県住宅供給公社が負担し、調査主体者には県教育委員会となり、49年度早々調査を実施することになった

ものである。

発掘調査は同団地の南の2区画約5000m²の地域を昭和49年4月25日～6月3日までの実質30日間で実施することになった。調査法は当初西区全面に2m方眼のグリッドを組み、表土層を除去することで進められたが、造成の時ブルドーザーが堅く踏み固めてしまったため、人夫さん達の中からは「食いが止る（疲労で食欲がなくなる状態）」の声が連続される状態となりグリッド法で掘り進むことは中止せざるを得なくなり、西区の北側と東区はブルドーザーによる表土の除去に切り替えることになる。また、この年は雨が多く、3日間も降り続く時も多くあり、調査は大幅に遅れ、全てが終了したのは7月中旬となってしまった。

調査の結果、発見された遺構は奈良時代～平安時代の住居跡14軒、掘立柱建物跡2軒、井戸跡4基、円形周溝遺構1基であり、この時代の下野国、河内都を知るうえでの大きな成果を上げることができたといえる。

報告書は当初50年3月に刊行される予定であったが、県教育委員会の緊急発掘調査が文化財保護法改正（51年10月）もあって急速に多くなり、遺物の整理、報告書作成の作業が大幅に遅れることになり、予定より3年間遅れ、53年4月刊行となったものである。

発掘調査に際しては、「調査は受益者負担を原則とする」という一般的には理解しづらい面もありましたが、協議の結果全面的に協力をしていただいた栃木県住宅供給公社の各位、また地元における人夫さん達の世話、その他全ての面で積極的に協力していただいた増瀬藤四郎氏（宇都宮市文化財調査員）とそのご家族に深く謝意を表する次第であります。

さるやま A 遺跡発掘調査組織

調査主体者 栃木県教育委員会

調査担当者 常川秀夫（栃木県教育委員会、文化課指導主事、現県立宇都宮農業高教諭）

山野井清人（栃木県教育委員会、文化課調査員、現作新学院高等部教諭）

調査協力者 宇都宮市教育委員会

増瀬藤四郎（宇都宮市文化財調査員）

2. 遺跡の地理的環境と付近の遺跡

宇都宮市の地形をみると、北部から西部にかけては丘陵地帯を形成しているが、東部から南部は関東平野の北部を形成する洪積台地と沖積地からなっている。

宇都宮市の西側には大谷石を産する新里町に源を発する姿川、中央部には田川、東部に県下最大の河川である鬼怒川があり、いずれも南流し、広大な冲積地をつくり、古々とした田園風景を眺ることができる。

これらの河川に狭まれ地域は関東ローム層を厚く堆積した洪積台地となっている。姿川と田川の間には宝木段丘面と呼ばれ、江崎島町から西川田町付近で幅 3.5km、標高は南で 90m、北で 100m を測る。この地域は以前は畑作地帯で宇都宮市への野菜類の供給地であったが、最近は急速に宅地化が進み新興住宅街を形成しつつある。

田川と鬼怒川との間には網島段丘面があり、北部の平出町付近で幅 2km、標高 120m、南部の本遺跡付近で幅 1.5km、標高 95m を測る。この台地も以前は畑と平地林とからなる純農村地域であったが、北部台地は全面平出工業団地となり、南部も卸売団地、瑞穂野団地などができる、また台地中央部を南北に新 4 号国道が建設されることになっており、急速に宅地化が進むと思われる。

付近の遺跡 田川の右岸段丘上には多く遺跡が連続して所在しており、南では下野薬師寺跡（南河内町）、多功廻寺跡（上三川町）、入名瓦で有名な上神主廻寺跡（宇都宮市）などは、この宝木段丘面の東端に位置する遺跡である。本遺跡付近の遺跡でも土師集落としては前山遺跡（5）から坂口遺跡（9）まで 4 遺跡が段丘崖に並んで所在している。

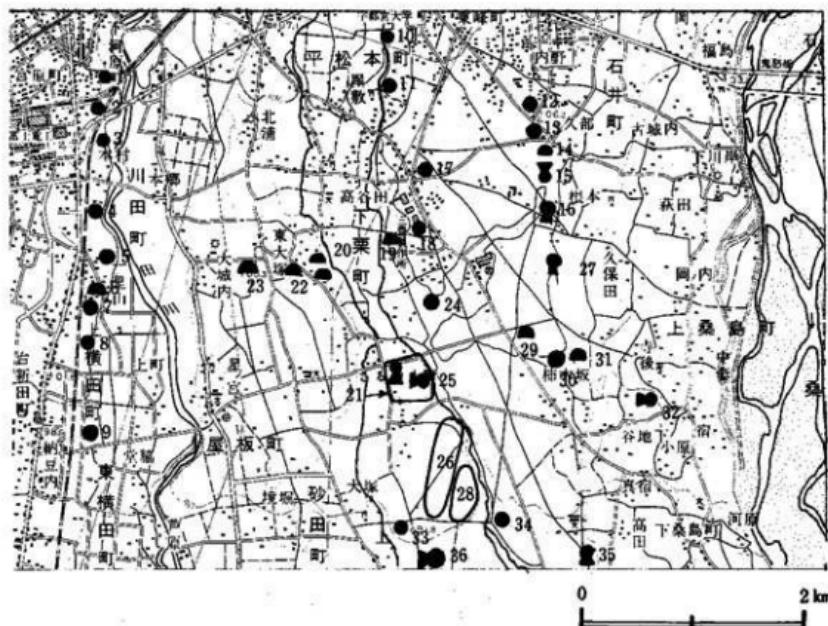
本遺のある網島段丘面上にも南端の三王山古

墳郡から北に向って連続的に続くのであるが、国道 293 号線から北側には登録された遺跡が皆無であることは不思議である。本遺跡と瑞穂野遺跡（28）は鬼怒川の小支流である舟付川（江川）の右岸に位置する広大な遺跡である。範囲は南北約 1km、東西約 500m で弥生時代～奈良、平安時代までの集落跡であることが確認されている。

本遺跡の北には宇都宮氏の家臣猿山大学の築城と伝えられる猿山城跡があり、江戸時代までは、この周辺の村落は猿山村であり、現在はさるやま町となっている。この城跡の中にあるのが天王塚古墳群で前方後円墳 2 基と円墳 2 基からなっている。大塚古墳は水田地帯の中にある大形の円墳で遠方からもよく見え墳頂部には三角点（105.3 m）がおかれている。集落跡では三豈南遺跡（18）と下栗本町遺跡（24）の十郎集落跡が本遺跡の北に位置するものとして知られている。

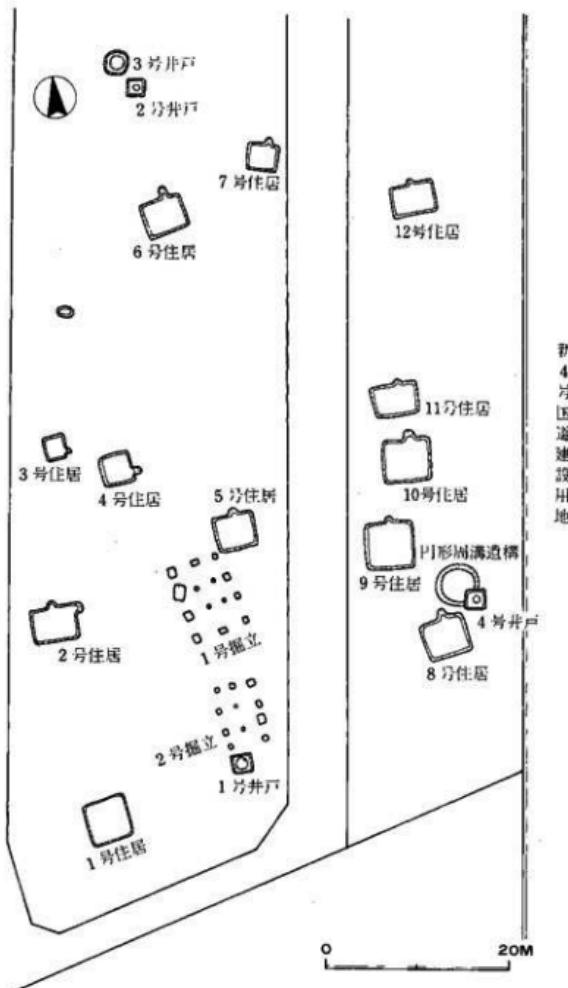
鬼怒川右岸の段丘崖上にも南北に並んで遺跡があり、そのうち久部台古墳群（16）は昭和 50 年に 4 号国道建設に伴い栃木県教育委員会が前方後円墳の周溝の一部と内部主体が旧地表下に入り込む円墳 3 基を調査している。この古墳群の北には前方後円墳の浅間山古墳（15）三日月神社古墳（13）、土師集落跡の志峰寮東遺跡

（12）がある。これらの地域は古代東山道の衣川駅と推定されている地域の一つである。すると、猿山遺跡及び瑞穂野遺跡は田郡駅から衣川駅に通じる道筋に位置することになる。また刑部という地名も残っており、河内郡刑部郷がこの地域である可能性も考えられる。



- 1 隅南莊付近A (縄文・後) 2 隅南莊付近B (縄文・土師) 3 東川田 (弥生) 4 川田南 (弥生)
 5 前山 (縄文・土師) 6 大日塚 (円墳) 7 大房林 (縄文・土師) 8 大房林南 (土師)
 9 坂口 (土師) 10 宇大南A (縄文・土師) 11 宇大南B (縄文・土師) 12 志峰寮東 (土師)
 13 三日月神社古墳 (円墳) 14 三日月神社南古墳群 (円墳4) 15 湿間山古墳 (前方後円)
 16 久部台古墳群 (前方後円1円墳3) 17 平松本町 (鎌倉) 18 三豊南 (土師)
 19 三豊南古墳 (円墳) 20 大塚古墳群 (円墳) 21 猿山城跡 22 東大塚古墳 (円墳)
 23 大塚古墳 (円墳) 24 下栗本町 (土師) 25 天王塚古墳群 (猿山遺跡 (土師))
 26 猿山古墳 (円墳) 27 久保田古墳 (前方後円墳) 28 端穂野 (弥生・土師) 29 桜ノ木坂西古墳群 (円墳)
 30 上桑島 (縄文) 31 桜ノ木坂古墳群 (円墳) 32 谷地下古墳群 (前方後円墳1円墳)
 33 瑞穂部内 (弥生) 34 舟付川東 (土師) 35 飯塚 (前方後円) 36 下桑島飛地 (前方後円墳)

第1図 付近の遺跡



第2図遺跡全図

3. 遺跡の概要

前述したように、瑞穂野遺跡と本遺跡を含む猿山遺跡とは、連続する広大な集落址であり、瑞穂野遺跡は住宅、工業団地となるため昭和48年宇都宮市が発掘調査を実施しているが、その結果団地の南端の舟付川に接する地域から弥生時代の住居跡、本遺跡と接する地域からは若干の鬼高窓の住居址と真間、国分期の住居跡が確認されている。

猿山遺跡は奈良一平安時代（真間、国分期）の集落址であり、本住宅団地に東接する新4号国道建設用地内からは50軒近い住居址が発見されている。

住宅団地内の遺跡は猿山A遺跡として調査を実施したのであるが、すでに造成工事は終了し、住宅が北側から建設されている段階であるため、

遺跡として残されている2区城を東区、西区と分けて調査を行なった。

その結果、西区には2棟の掘立構造と7軒の住居址と3基の井戸跡が発見されている。

住居址は1号は構築途中で放棄。2号は2度拡張。3号、4号、7号は小形の住居址で掘込みの外側に柱穴があるものである。

隣接して構築されている2号、3号井戸跡と掘立構造は構築法が異っており構築時期に差があるとも考えられる。

東区からは住居址5軒と井戸跡1基が発見されている。住居址は同一方向を向き、北カマドであり、12号住居址を除く各住居址には柱穴4穴がある。4号井戸跡は2号井戸跡と同じ構築法であった。

4. 住居址及び出土遺物

1号住居址

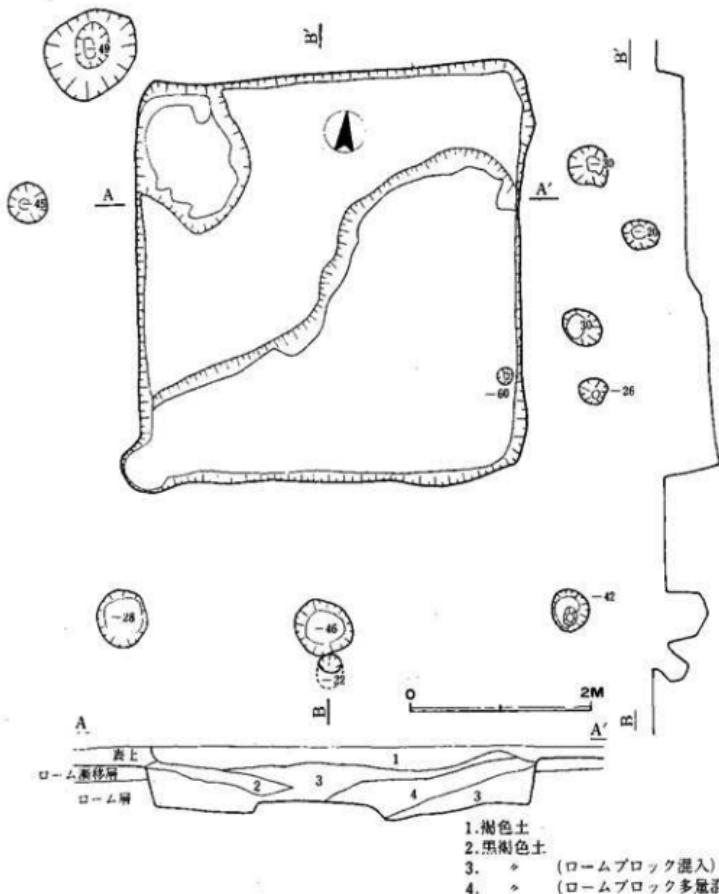
A区の南端にある住居址である。規模は東西4.2m、南北4.5mの方形で、床面は北西コーナーの部分と、南西コーナーから東壁にかけての南東部半分が一段深く掘られており、壁の深さは北壁で30cm、南壁で60cmを測り、住居跡の南と北とでは20cm～30cmの段差がある。

住居址内にはカマドの構築は認められなく、柱穴も東壁に接して直径18cm、深さ60cmのものがあるだけである。住居址外には深さ20cm～49cmのビットが10穴発見されている。北東隅部外にある大形のビットは柱穴とするには疑問が

あるが他は柱穴と考えられる。

住居址内の埋土を見ると、第3層の黒褐色（ロームブロック混入）が東西とも壁上面から斜めに床面まで入り込んでおり、その上の第4層のロームブロックが多量に含まれた黒褐色土が、やはり東壁から斜めに入っている。この多量のロームブロックは自然埋没土とは考えられず人為的な投げ込みであろう。

また、住居址内からの出土遺物は皆無である。これらのことから本住居は、床面の掘下げの途中で放棄され、その後人為的に埋められたものと思われる。



第3図 1号住居跡実測図

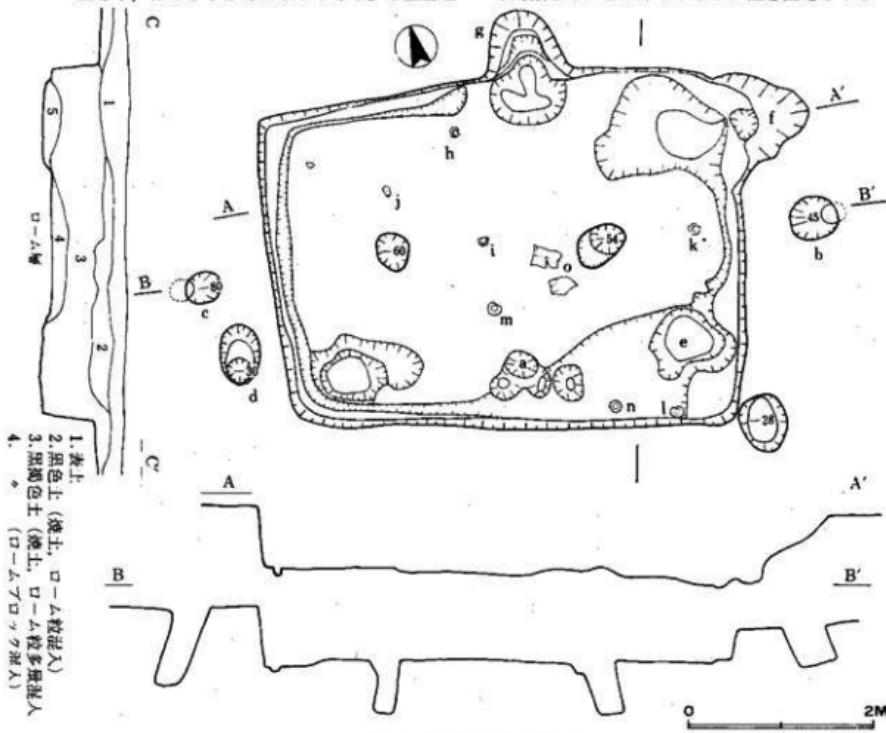
2号住居址

1号住居址の北22mの地点に構築されている。規模は東西 5.1m、南北は東壁の部分で 3.9m、西壁で 3.4mを測し不整形の方形を呈し、深さは約60cmである。床面は中央部は堅く踏み固められているが四隅の部分は柔らかく若干窪んでいる。壁の周囲には周溝が掘られており巾は5cm~15cm、深さは 4cm~6cmである。

住居址内のピットは中央部に 2穴あり、深さは60cmと54cmで深く掘られ、共に内傾している。主柱穴と思われる。南壁寄りの中央部に窪んだ部分があるが、そのうち a のピットは深さが30cmあり、はっきりしたピットである。本住居址

以外でも同じ様な位置にピットが掘られている例が 6住居址ある。このピットの役割であるが、壁の深さがローム上面からでも60cmあり、これに旧表土までを考えると80cm内外となるので当然階段があったと考えられる。入口が南側にあったとすると、このピットの中に丸太を入れ、入口から降りてくる階段を固定させるために掘られたとも考えられる。

住居壁外からは 4 ピットが確認されている。b と c ピットは住居址内の 2 ピットと直線上に並ぶことになり、2 本の主柱穴を外側から支えるためのものと思われる。d ピットは北に向って内傾しているので e ピットの柱を固定させる



第4図 2号住居址実測図

ためのものとも考えられる。

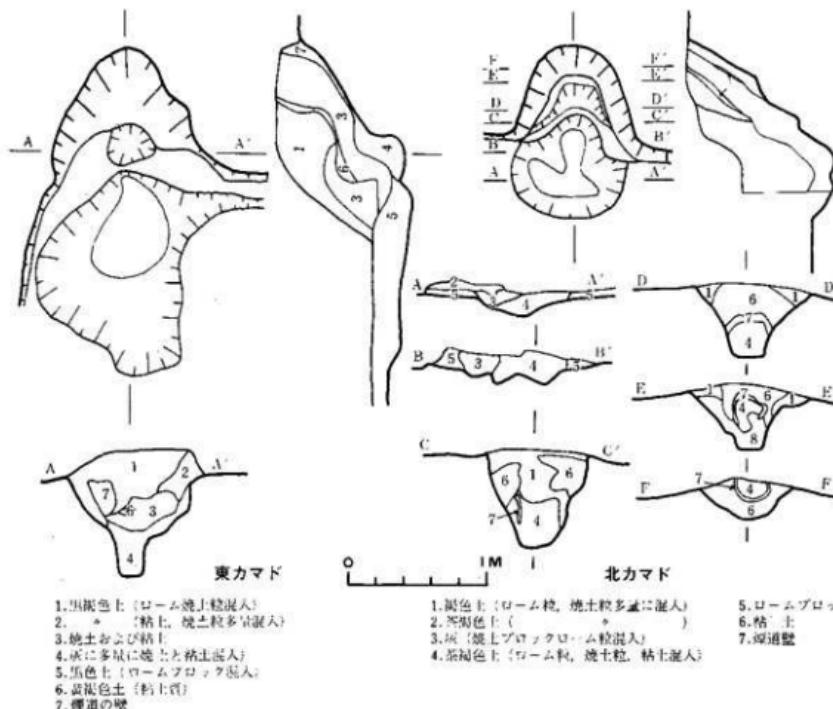
カマドは3基構築されている。eのカマドは火床の部分の掘込みと東壁に焼土が残っている程度である。このカマドは住居跡を拡張した時に消失し、新たにf,gのカマドが作られたものである。拡張規模は東壁を約60cm広げたものである。

出土遺物は床面直上からは須恵器の壺が5個体(h~L)と蓋(m), 土師器の壺(n)であった。Oの上師器の甕は床面より30cm上部から出土し、甕の下から須恵器の甕の広部が出土している。

カマド 前述したように東壁にあるeのカマドは消失している。北壁に接して作られている

カマド(f)は壁外を90cm掘り込んで煙道とし、煙道の傾斜は約35°である。袖部は粘土を用いて構築し、火床部の大きな掘り込みは、ロームブロックと黒色土の混入土を張るために掘ったものである。火床の奥には幅20cm、深さ26cmの垂直に落ち込む掘り込みがあるが用途については、甕をのせるために狭くしたか、火力を集中させるためと考えられるが断定はできない。

北壁中央にあるカマドは壁外を約80cm、掘り込んで煙道とし、煙道の傾斜は70°と急傾斜である。袖部はロームブロックを用いており、燃焼部の天井と煙道には粘土が使用されて煙道の壁もよく遺存している。



第5図 2号住居跡カマド実測図

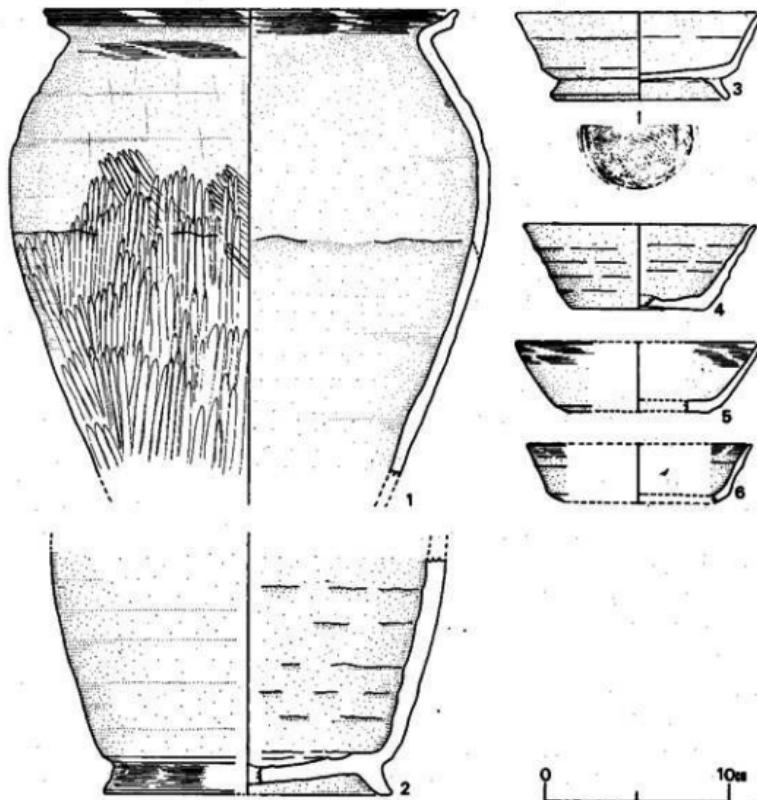
出土遺物・覆土中の出土遺物（第6図）
土師器・變形土器（1）

外面は、口縁部から頸部付近までは横ナデがみられる。頸部から胴部上半までは縱位の籠削りと思われる砂粒の動きがみられるが、頸部ではその後に横ナデを、胴部上半から底部付近までは縱位又は斜位の籠磨きが施こされている。内面は、口縁部には横ナデが、頸部以下胴中位までは斜位の籠ナデの痕跡が若干みられる。ま

た胴中位には輪積み痕が一段みられる。胎土は砂粒を多く含んでおり良好ではない。焼成は普通であり、色調は黄褐色を呈している。

須恵器・水瓶（2）

上半部を欠損する。外面は全面に横走痕がみられる。胴部下半には籠削りがみられる。胴部下端は高台を貼り付けたの方に迴転籠削りが行なわれている。内面にも全面に横走痕がみられ



第6図 2号住居址覆土出土遺物

るが、成形のさいの凹凸が著しく残る。胎土は小石の混入がみられ不良であるが、焼成は良好である。色調は青灰色を呈するが、外面には灰かぶりがみられる。

坏形土器（3, 4, 5, 6）

（3）、外面は胴部上半に成形のさいの稜がみられる。胴部下端は範削りが行なわれている。底部には糸切り痕が明瞭に残るが、周辺は廻転範削りが行なわれ、そのうちに高台を貼り付けている。高台の内側はナデが施こされている。内面は、底面に成形のさいの凹凸が若干みられる。胎土は砂粒が混入しているが良好である。焼成も良好であり、青灰色を呈する。

（4）、外面はロクロ成形のさいの横走痕および四段の稜がみられる。底部は切り離しのうちに廻転範削りを行なっている。また体部下端にも廻転範削りを行なっている。内面にもロクロ成形のさいの四段の凹凸がみられる。胎土は砂粒、雲母などが多く含まれており良好ではない。焼成も不良であり、軟弱である。色調は黄灰色を呈する。

（5）、全面にロクロ成形のさいの横走痕がみられるが、凹凸はみられない。体部下端は廻転範削りが行なわれている。底部は切り離しのうちに周囲に廻転範削りが行なわれている。胎土は砂粒が多く混入しており良好ではない。焼成は不良であり、灰色を呈する。

（6）、内外面にロクロ成形のさいの横走痕がみられ、外面には一般の稜もみられる。胎土は精撰されて良好であるが、焼成は悪く軟弱であり、淡茶色を呈する。

床面出土の遺物（第7図）

土師器・壞形土器（1, 2）

（1）、東壁のカマドの焼土中からの出土である。肩部以下を欠損する。外面は、口縁部に横ナデを施したのちに、肩部以下に横位の範削りを行なっている。範は右から左に動かして

いる。内面は、口縁部に横ナデを施したのちに肩部以下に横位の範ナデを行なっている。胎土、焼成ともにきわめて良好であり、淡褐色を呈する。

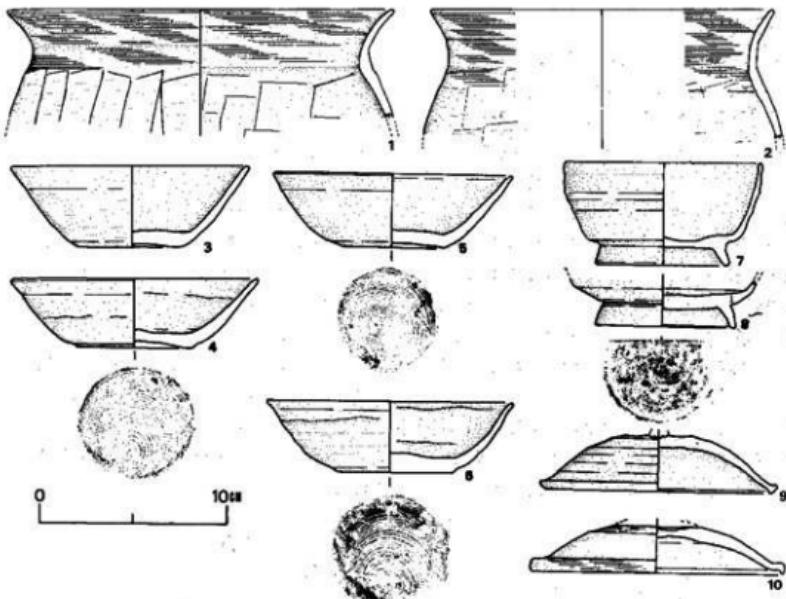
（2）、東壁のカマドの焼土中からの出土である。口縁部から肩部付近までの約五分の一ほどの破片である。外面は、口縁部から肩部付近まで横ナデを施したのちに肩部以下に横位の範削りを行なっている。内面は口縁部に横ナデ、胴部に横位の範ナデを行ない、そのうちに全面にナデを施こしている。胎土焼成ともにきわめて良好であり、褐色を呈する。

坏形土器（3）外面は、口縁部から体部下端までロクロ成形のさいの横走痕がみられる。底部は糸切りののちに一方向の範磨きを行なっている。糸切りののち体部下端を範削りしている。内面は黒色を呈し、範磨きが行なわれている。胎土焼成ともに良好であり、黄茶色を呈する。

須恵器・坏形上器（4, 5, 6, 7, 8）

（4）、内外面ともにロクロ成形のさいの横走痕がみられる。外面は体部中位に成形のさいの接合痕が一本みられる。底部には糸切り痕が明瞭に残る。切り離しののち体部下端を指頭によっておさえ、くぼませている。内面には成形のさいの接合痕が二段みられる。底面にも成形のさいの凹凸が若干みられる。胎土は少量の砂粒を含み良好であるが、焼成は悪く軟弱である。灰色を呈する。

（5）、内外面ともに口縁部から体部中位までロクロ成形のさいの横走痕がみられる。体部上位に成形のさいの稜が一段みられる。底部には糸切りの痕跡が明瞭に残る。糸切りののち体部下端を指頭によっておさえてくぼませている。内面は底面に成形のさいの凹凸が若干みられる。胎土は砂粒を含み良好であるが、焼成は悪く軟弱である。素地は青灰色を呈するが、部分的に淡赤色を呈する。



第7図 2号住居址床面出土遺物

(6)、外面は成形のさいの凹凸がみられる。底部は糸切りを行なったのちに周囲を手持ちの箇削りを行なっている。体部下端は切り離しののち指頭によっておさえてくぼませている。内面にも成形のさいの接合痕が2本みられる。胎土は良好であるが焼成があまり良くないためにもろい。淡灰色を呈する。

(7)、外面には成形のさいの凹凸が4段ほどみられる。体部下端は箇削りが行なわれている。底部は切り離しののちに廻転箇削りを行なう。そののちに高台を貼り付けている。内面は底面に成形のさいの凹凸がみられる。胎土は砂粒を含み良好であり、焼成もきわめて良好である。青灰色を呈する。

(8)、体部を欠損する。底部は壊切りのうちに体部下端を含めた箇削りを行ない、そののちに高台を貼り付けている。胎土は砂粒を含み

良好であり、焼成も良好である。灰黒色を呈する。

蓋形土器 (9, 10)

(9)、全体の約三分の一およびつまみを欠損している。外面はつまみの周囲に二段の廻転箇削りが行なわれている。また成形のさいの接合痕が一部に残っている。内面は成形のさいの凹凸が二段ほどみられる。また一方向の茶褐色の刷痕がみられる。胎土は砂粒を含み良好であるが、焼成は不良であり、軟弱である。

(10)、全体の約二分の一ほどの破片である。内外面ともに成形のさいの凹凸がみられる。つまみの周囲には二段の廻転箇削りが行なわれている。内面中央部付近には「チ」の範記号がみられる。胎土は砂粒を含み良好であり、焼成も良好である。青灰色を呈する。

3号住居址

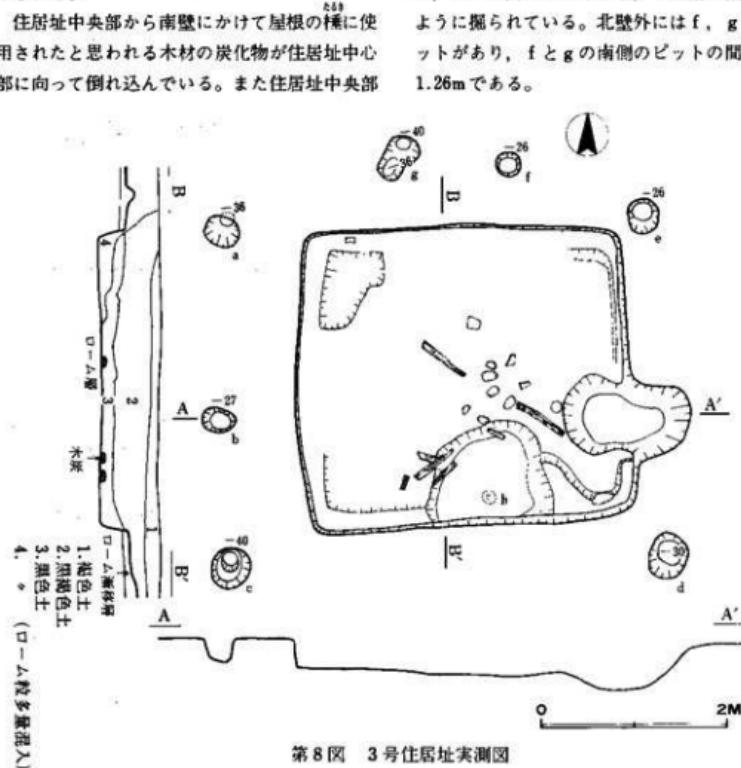
2号住居址の北方東18mの地点にある方形の住居址である。住居址の規模は東壁3m、西壁は若干外窓し3.2m、南壁は3.44m、北壁3.34m、壁の深さは南、北、西壁とも30cmを測する。床面は堅く踏み固められた感じは受けない。カマドの北～北東隅角部にかけては周溝と思われる浅い掘込みが認められる。北西隅角部と南西隅角部は壁から20cm内側、南東隅角部は壁から10cm内側から浅い落込みが認められるが、周溝とすることは困難である。南壁中央部にも東西1.2m、南北1mの部分に深さ10cmの落込みが認められる。

住居址中央部から南壁にかけて屋根の様に使用されたと思われる木材の炭化物が住居址中心部に向って倒れ込んでいる。また住居址中央部

に集中するような形で長径10cm～20cmの河原石と須恵器の大甕の破片が床面から約10cm～20cm浮の状態で出土している。

住居址内からの出土遺物は床面上では南壁寄りの中央部から須恵器の壺（第10図-2）北壁の北東隅角部からは砾石が出土している。浮きの状態では前述の須恵器の甕の破片である。

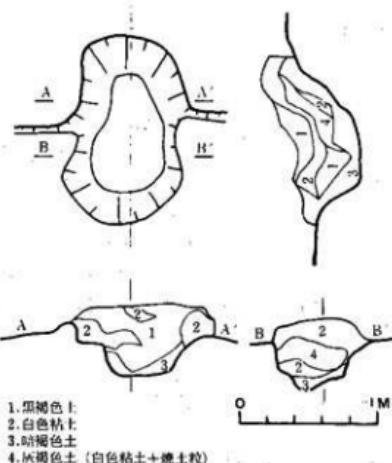
住居址内に柱穴は発見されていない。住居外には7ピット（a～g）が発見されており、住居址の壁および屋根の構築するために掘られたピットであると思われる。西壁外には3ピットが直線上に並んでおり、間隔はa～b間2.15m、b～c間1.50mであり、aは南に傾斜するよう掘られている。北壁外にはf、gの2ピットがあり、fとgの南側のピットの間隔は1.26mである。



第8図 3号住居址実測図

住居内にピットがないので、上屋の構築を考えるとすれば、各隅角部の外側にあるa, c, d, eの4ピットが主柱穴の役割をするものと思われる。間隔はa-c間, d-e間は共に3.65cm, c-d間は4.7m, a-e間は4.5mとなる。北壁外の2ピットがaとeピットを結ぶ線から約50cm外側にあることが留意される。これについては屋根を張り出させるため外側に2本の柱を設けたかと考えたが確証はない。

カマド 東壁の中央部より南に寄った地点に構築している。壁外を60cm掘り込んで煙道を作り、火床部は75cm(東西)×85cm(南北)、深さ20cmの規模で掘り込んで作られている。袖部は南北とも壁から長さ約30cmの部分まで確認でき、白色粘土が使用されている。燃焼部には黒褐色土が充填されているが、木炭、焼上粒の混入は多くない。煙道にも焼土等は多く



第9図 3号住居址カマド実測図
は認められず、灰褐色土中に焼土粒が認められる程度である。

出土遺物(第10図)

覆上中の出土遺物

土師器・环形土器(1)

外面には成形のさいの棱が四段ほどみられ、ほぼ全面に横走痕がみられる。内面は黒色を呈し、荒磨きが施されている。胎土は砂粒を含み、須恵器に近似している。焼成もきわめて良好であり、堅い。色調は器の外面のみが淡茶色を呈している。

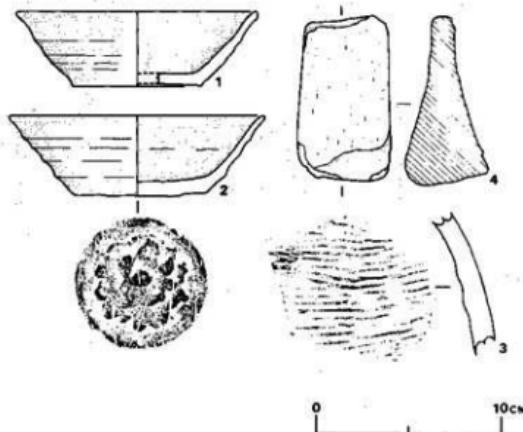
床面の出土遺物

須恵器・环形土器(2)

外面はロクロ成形のさいの棱が四段と、全面に横走痕がみられる。内面は指頭による凹凸が若干みられる。胎土は小石を含み不良であるが、焼成は普通であり、色調は青灰色を呈している。

环形土器(3)

胴部破片である。外面には平行叩き目痕がみ



第10図 3号住居址出土遺物実測図
られ、内面にはあて目痕がみられる。
砥石(4)
片面には刷痕がみられる。使用痕と思われる。

4号住居址

3号住居址の西7mの地点に隣接して構築されている小形の住居址である。規模は東壁2.3m、西壁2.35m、南壁2.3m、北壁2.3mで正方形に近い。コーナーを若干隅丸にした形である。壁は断面形を見ると、外傾しているが構築時は垂直であったろうと思われる。壁の深さは南壁で50cm、北壁で42cmである。B-B'のセクション図に示すように、南壁では旧表土が20cm、ローム漸移層が5cmで、ローム層をさらに25cm掘り込んで床面を構築している。

床面は3号同様、固められた様子は感じられない。周溝も認められなかつたが南西隅角部に深さ約20cmの落ち込みが認められた。また、北壁寄りとカマド付近の床面上に炭化した木材片が2片あるので、この住居も火災あつているものと考えられる。

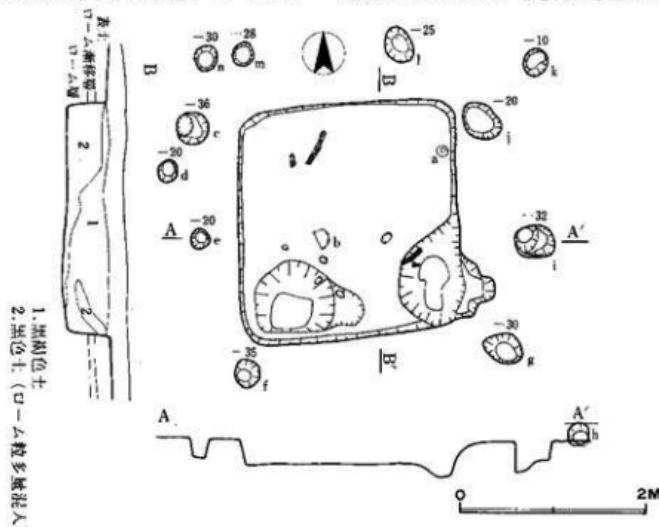
住居址内の出土遺物は、住居址中央部の床面上15cm浮い地点から須恵器の大甕の破片b、(第13図1)が1片とその周辺同一レベル上か

ら河原石4個が出上しており、住居址廃絶後の投げ込みと思われる。

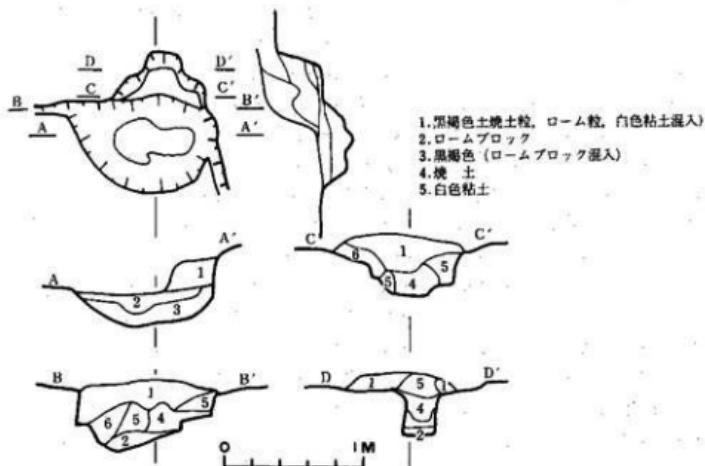
3号住居址同様、住居址内には柱穴ではなく、住居址外に柱穴と思われるビットが12(e-n)確認されている。3号同様、住居外の主柱穴を考えるとすれば、e, f, g, jの4ビットと考えられる。間隔はe-f間2.7m, j-g間2.5m, c-j間3.1m, f-g間2.8mである。eとiは棟持柱の可能性が強い。北壁外にk, L, m, nの4ビットが直線的に並ぶことが注目される。

カマド 東壁の南隅角部に接するように構築している。煙道構築のための壁外の掘り込みは2段に掘られている。火床部は70cm(南北)×100cm(東西)の範囲を深さ25cm掘っているが、住居の床面までのレベルにはロームブロック

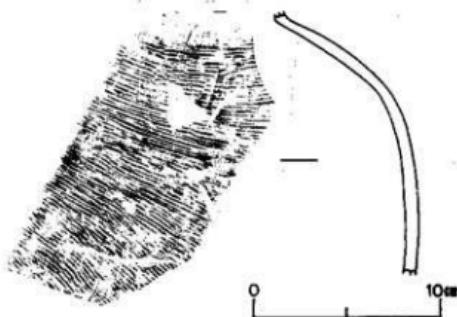
(2)と黒褐色土が充填されており、カマドの周囲の床面だけを張床にしたとも考えられる。袖及び燃焼部には白色粘土が使用されている。煙道の立ち上りは80°と急角度を呈している。



第11図 4号住居址実測図



第12図 4号住居址カマド実測図



第13図 4号住居址出土遺物実測図

出土遺物（第13図）

床面の出土遺物
須恵器・變形土器（1）
肩部破片である。外面には細い平行叩き目痕

がみられ、内面にはあて目痕がみられる。胎土は精撰されているが、焼成は不良であり、淡赤褐色を呈している。

5号住居址

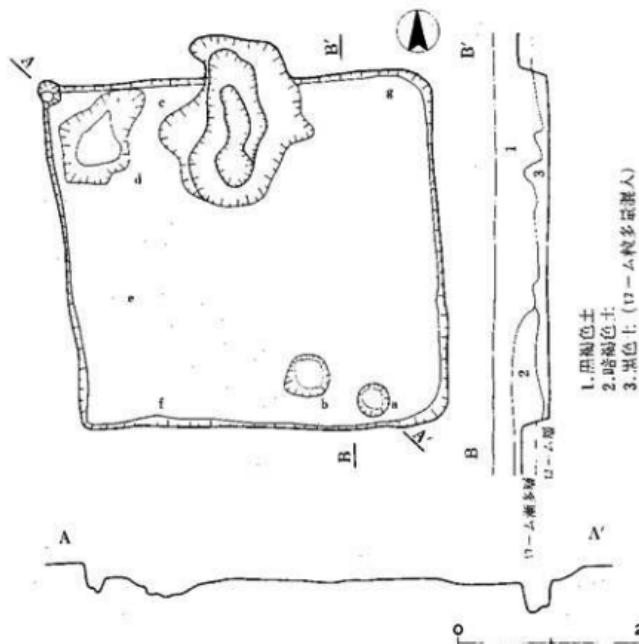
4号住居址の東南東15m、1号掘立遺構に接して、カマドを北壁中央にもつ住居址である。住居址の規模は東壁長3.8m、西壁長3.7m、南壁長3.95m、北壁長4.1mを測し、壁の深さはローム漸移層からの掘り込みが認められ、ローム漸移層の厚さは15cm、その下のローム層を12cm掘り込んでいるので、計27cmとなるが、旧表土を含めると、さらに深くなると思われる。今回調査の14軒の住居址中では最も浅い住居址である。

床面は固く踏みかためられた様子ではなく、全体的に凹凸が多く、北西コーナーと南壁寄りの中央やや東寄りの部分に深さ約15cmの深い溝みが認められる。柱穴は北西コーナーと南東コーナー寄りの地点と2柱穴だけが確認されている。

aピットは長径30cm、深さ15cm、bピットは直径35cm、深さ30cmと小形のピットである。

住居址内の出土遺物としては鉄片が4地点(c~f)から出土している。鉄片は破片となっているので用途は不明である。北東コーナーからは土器の环(g、第16図4)が出土している。

カマド 北壁の中央部に構築している。壁外の掘り込みは40cm(南北)×100cm(東西)と幅広く掘られており、又火床部も幅広く、不整形に掘られている。袖は本達跡の場合白色粘土を使用しているものが多いが、本住居址の場合は黄褐色土(ローム上)を使用しており、袖幅(内法)は45cmを測する。燃焼部から煙道にかけて焼土が多く、特に煙道部に多く認められる。



第14図 5号住居址実測図

出土遺物（第16図）

床面の出土遺物

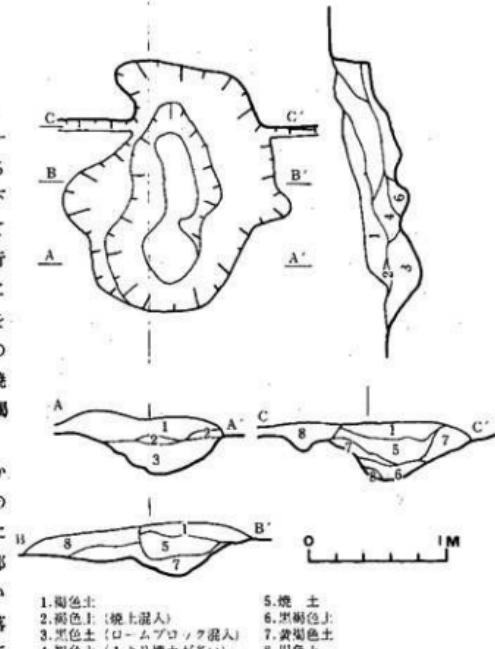
土師器・変形土器（1）

カマドの焼土中からの出土である。口縁部から肩部にかけての約七分の一ほどの破片である。外面は口縁部から肩部までは横ナデを行ない、それ以下の残存部は縦位の範ナデが行なわれている。内面は頸部に横位の範削りを行なったのちに、口縁部に横ナデを施している。それ以下は横位の範ナデを行なっているが、肩部付近には成形のさいの接合痕が一段みられる。胎土焼成とともにきわめて良好であり、淡赤褐色を呈している。

环形土器（2） カマドの焼上中からの出土である。全体に成形のさいの回凸がみられる。外面では体部下半に斜位の範削りを施したのちに、口縁部から体部中位まで横ナデを施している。体部下端および底部は器面の剥落が著しい。内面は口縁部から底面付近まで横位の範磨き、底面は一方向の範磨きが施されている。胎土焼成とともに比較的良好であり、淡黄褐色を呈する。

（3）。住居址南東コーナーの床面からの出土である。外面は口縁部から体部中位まで横走痕が、中位以下体部下端まで迴転範削りを行なっている。底部は切り離しのちに迴転範削りを行なっている。内面にはほぼ全面に横走痕がみられる。胎土焼成とともにきわめて良好である。外面は黒褐色を呈しているが、内面は淡黄白色を呈している。

（4）。外面にはロクロ成形による横走痕がみられるが、体部下端は横位の範削りが施されている。底部は切り離しのち一方向の範削りを行なっている。内面にもロクロ成形のさいの横走痕がほぼ全面にみられる。胎土は砂粒の



第16図 5号住居址カマド実測図

混入が多く不良である。焼成も悪く軟弱である。黒褐色を呈する。

（5）。外面はほぼ全面にロクロ成形による横走痕がみられるが、体部下端は範削りによって消されている。底部は切り離しのちに一方向の範削りが施されている。内面は黒色を呈しており、入念な範磨きが施されている。胎土は比較的良好であるが、焼成は不良であり軟弱である。淡黄褐色を呈している。

須恵器・环形土器（6） 底部のみの破片である。ロクロ成形されており、底部は切り離しのちに迴転範削りが行なわれ、その後高台が貼り付けられている。内面は底面を除く他の部分には自然彩がかかっている。胎土焼成とともにきわめて良好であり、淡灰色を呈している。

不明鉄器（7, 8, 9） 三片ともカマドの周囲から出土したものである。8, 9は焼品の一部と思われるが、7は不明である。

6号住居址

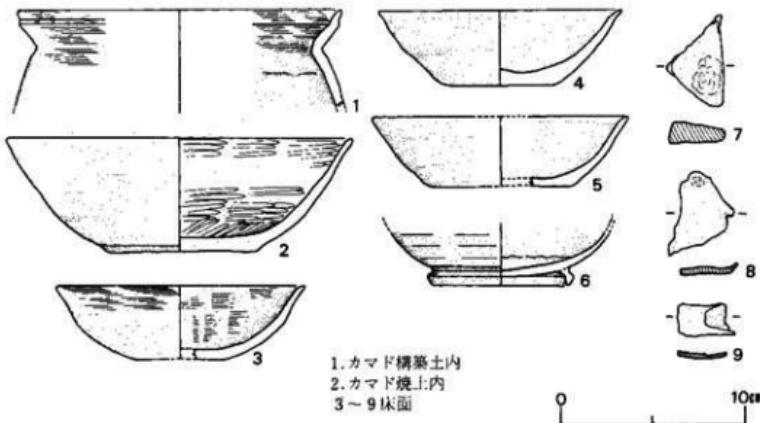
5号までの住居部から北へ約30mの地点にある。住居址の規模は東壁は外滴しており、壁長は3.65m。西壁は中央より北寄りの部分にピットがあり、壁長は3.7m。南壁、北壁の壁長は共に4.2mで、若干東西に長い長方形を呈する平面形である。壁の深さはローム下42cmで、垂直に近い形で掘り込まれている。

床面の中央部はローム面を固く踏みしめている痕跡が見られる。図版9の住居址の写真を見ると、床面に小さな穴が多数あるが、これは、恐らく木の根がローム面に入り込んで黒色土化したもので、人為的なものではないと思われる。住居址の北東および南東コーナーと、南西コ

ーナー寄りの部分に落ち込みがあるが、北東コーナーのものはカマドに付随する貯藏用のピットと考えられるが、他のもの用途は不明である。また南東コーナー寄りの床面上からやや浮いた状態で屋根の樋木に使用したと考えられる木材の炭化物が出上している。

住居址内の柱穴はgとhの2穴が確認されている。gは西壁に接して、壁から張出す形で掘られている。住居址外には、i～rまで11ピットが確認されているので、3号、4号住居址同様、住居址外のピットを中心的に用いて、上屋を構築したものと思われるが、どのピットが主柱穴であるかなど各ピット間の規則性については今後検討を加えたい。

また、南壁外にピットが認められない点も3号、4号住居址同様注目されるものである。住居内の出土遺物であるが、全て床面から浮いた状態で出土している。各遺物のレベルを見ると住



第16図 5号住居址出土遺物実測図

居址の中央部にある遺物が最も低く、周辺に行くに従って高くなっている。住居址の埋没状態を示すもので、住居址の壁際から埋ってゆき、中央部が窪んだ状態になる。その課程で遺物と河原石、割石などが投げ込まれたものと考えられる。

カマド 北壁の中央部から70cm東へ寄った地点に構築されている。壁外の掘り込みは90cm（南北）×70cm（東西）の規模で、煙道の立ち上りは60°と急角度で深さは60cmを測る。火床部の掘り込みは90cm（南北）×110cm（東西）、深さ30cmであり、はっきりと確認できる。袖部は白色粘土を使用しており、袖幅は50cm、高さは35cmである。燃焼部から煙道にかけては厚さ20cm～30cmで焼土が認められる。

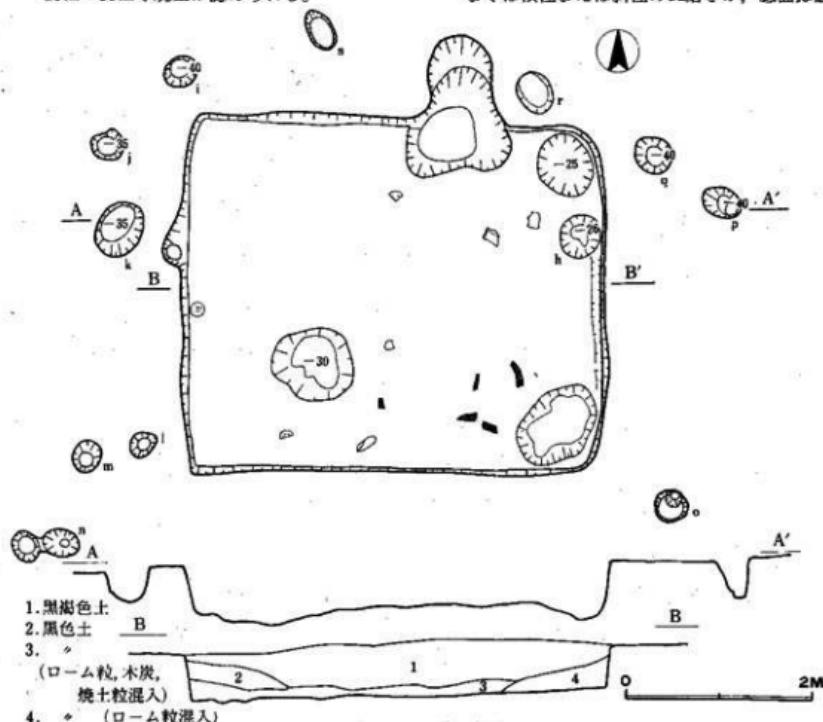
出土遺物（第19図）

本址の遺物は全て覆土中からの出土であり、床面からの遺物はない。出土状態は住居址中央部になるにしたがって深い位置から出土している。

土師器・壺形土器（1, 2）

(1)、外面は口縁部から稜まで横ナデ、稜以下は底部も含めて雑多な方向の鋸削りを行なっている。内面は口縁部に横ナデ、他は底部を含めたナデ仕上げが行なわれている。胎土焼成ともに良好であり、淡黄褐色を呈する。

(2)、外面はほぼ全面に横位または斜位の鋸削りが行なわれ、口縁部はその後に横ナデが施されている。内面は口縁部から底面付近までは横位または斜位の鋸磨きが、底面は放射



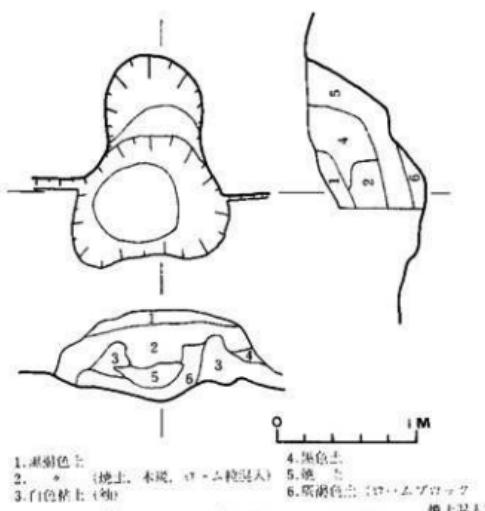
第17図 6号住居址実測図

状の鏡磨きが施されている。胎土焼成ともに良好であり、明茶樹色を呈する。
須恵器・壺形土器（3, 4, 5）

（3），外外面ともにロクロ成形による横走痕がみられる。体部下端は迴転範削りが行なわれている。底部は切り離しののちに迴転範削りを行なっている。胎土には若干の砂粒が含まれるが比較的良好である。焼成も良好であり、青灰色を呈する。

（4），外表面は口縁部直下に成形のさいの稜が一段みられる。底部は切り離しののちに周囲に迴転範削りを施している。体部下端は指頭によっておさえていた。内面には成形のさいの稜が二段ほどみられる。胎土は砂粒を含むが比較的良好である。焼成も良好であり青灰色を呈する。

（5），約三分の一ほどの破片である。外面上にはロクロ成形のさいの稜が二段と横走痕がみ

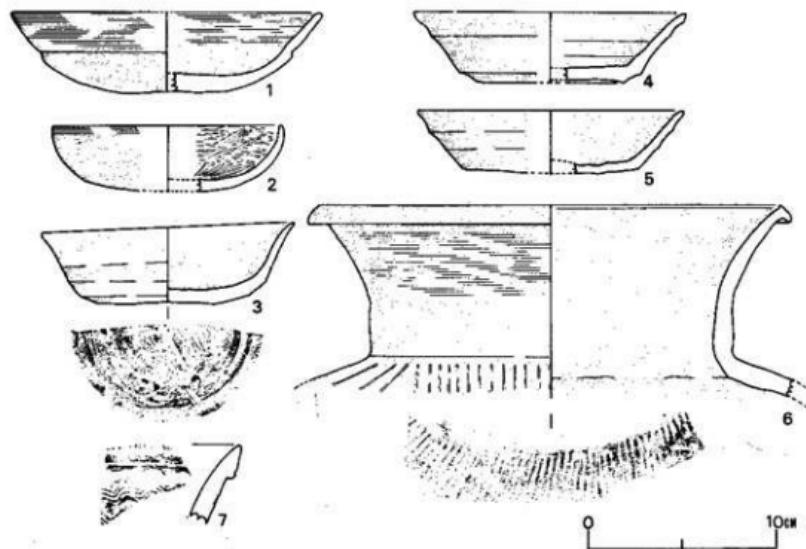


1. 鏡樹色土
2. " (地土、木炭、ガム糊混入)
3. 白色粘土(砂)

4. 黒色土
5. 砂
6. 風化色土(セイムブロック)
機械混入

第18図 6号住居址カマド実測図

られる。底部には窓切り痕が明瞭に残る。内面は底面に成形のさいの若干の凹凸がみられる。胎土は砂粒を含むが良好である。焼成も良好で



第19図 6号住居址出土遺物実測図

あり、青灰色を呈する。

變形土器（6） 口縁部から肩部にかけての約二分の一ほどの破片である。外面は口縁部から頸部までには横走痕が、肩部には格子状の叩き目痕がみられる。内面には輪積み成形によると思われる凹凸が四段ほどみられる。口縁部から頸部まで横走痕がみられ、肩部にはわずかに接合痕が残る。胎土は小石の混入が若干みられ良好ではないが、焼成は良好であり青灰色を呈している。器表は灰がぶりによって黒色を呈する部分もみられる。

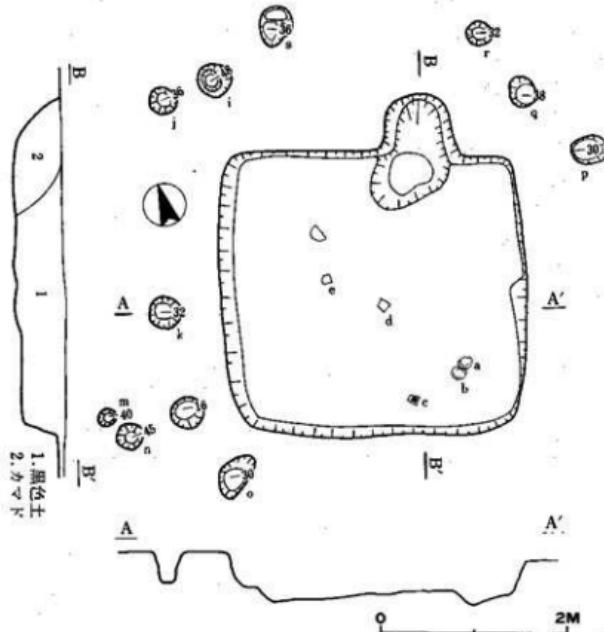
（7），口縁部の破片である。口縁部下端には沈線が一本みられる。頸部には三本一単の櫛描波状文がみられる。胎土焼成とともに良好であり、青灰色を呈する。

7号住居址

6号住居址の東北東12mの地点にある小形の住居址である。住居址の壁を確認することが困難であり、壁の崩れが大きいため、壁は斜めに落ち込んでいる。これらのことから、住居址の規模は東西約3m南北2.8mの方形となり、壁の深さはローム面を30cm掘り込んでおり、ローム漸移尽、旧表土を考えると壁高はさらに深くなる。

床面は、踏まれて固くなっているという感じは受けない。また周溝、柱穴も認められない。

住居址外からはi～rまでの11穴の柱穴が確認されている。東壁中央部の壁外に住宅用の排水管が埋設されているため、ピットの存在が不明であるが、南東コーナーから南壁の外側にかけてはピットが発見されていない。これらのビ



第20図 7号住居址実測図

ットについて検討するとしのビットが深さ16cmと浅い感じを受けるが、他は深さ30cm～48cmと深いビットになっている。またビットの配列を見ると、m, nとr, sの4ビットを除く各ビットは壁の外側に並ぶ柱穴列として考えてよいと思われる。rとsの2ビットは柱穴列の外側に位置しており、カマドの構築に関連するビットとも考えられる。

遺物の出土状態であるが全てのものが浮の状態であり、

a, bの須恵器の环は床面上40cm, cの布目瓦は45cm, dの須恵器の蔓も40cm浮いており、河原石などと共に住居が廃絶された後に投げ込まれたものと思われる。

カマド 北壁中央部から東へ50cm寄った地点に構築している。壁外の掘り込み60cm(南北)×80cm(東西)で煙道部の立ち上りは約50°である。火床部の掘り込みは深さ16cmと浅い。袖部、燃焼部の天井、煙道部はローム粒と白色粘土の混入土を使用して構築しており、袖幅45cm、煙道の残りも比較的よく、焼成部寄りで約20cm、煙道口で10cmの焼上の堆積が認められる。

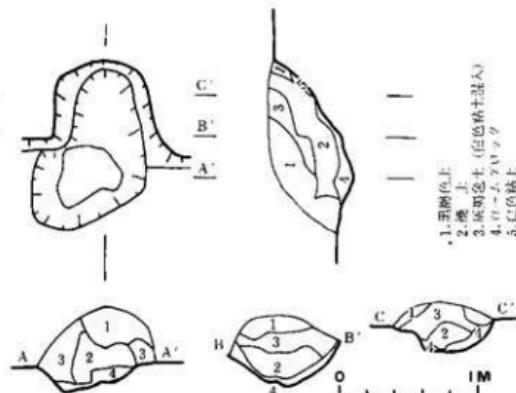
出土遺物(第22図)

須恵器・變形土器(1)

外面は口縁部から頸部にかけては横ナデが施されているが、口縁部中位には輪積み痕が一段残る。内面は外面と同様に口縁部から頸部まで横ナデが施されている。胎土は砂粒、小石が混入しており不良である。焼成も悪く軟弱である。灰緑色を呈する。

変形土器(2, 3, 4, 5, 6, 12)

(2) 外面には成形のきいの二段の稜がみられる。底部には窪切り痕が明顯に残る。内面



第21図 7号住居址カマド実測図

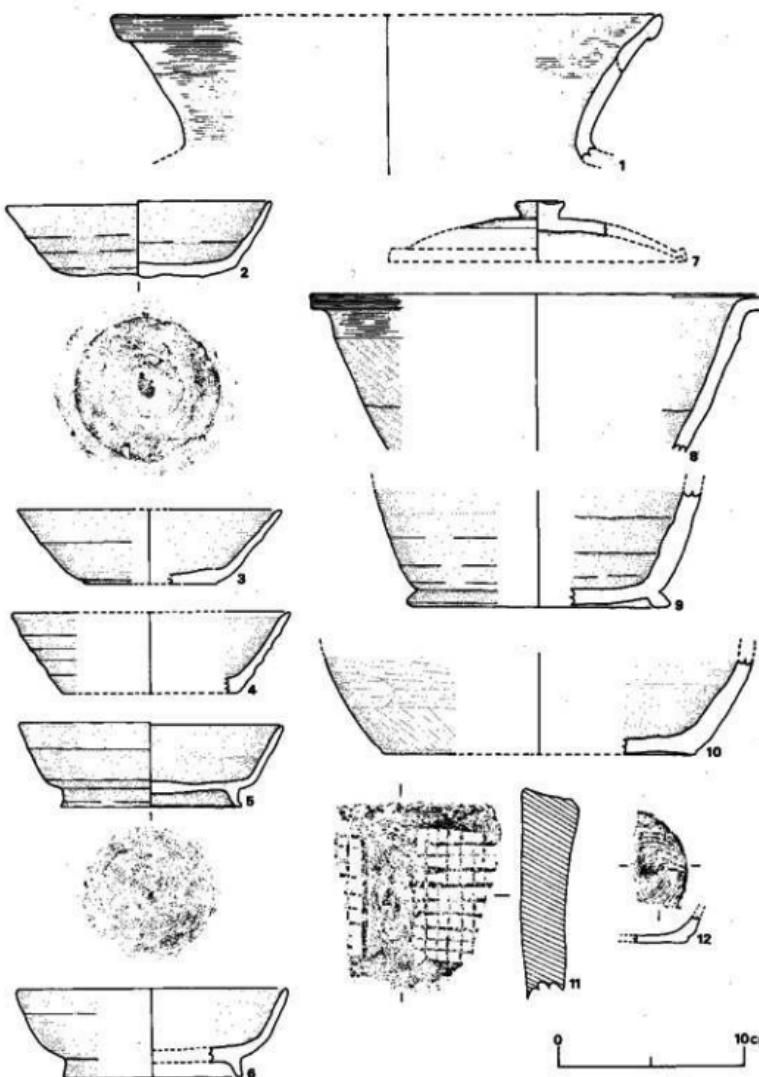
にも成形のきいの凹凸がみられる。胎土は良好であるが焼成は不良であり灰色を呈する。内面には黒褐色の有機物が付着している。

(3) 全体の五分の一ほどの破片である。外面にはロクロ成形による横走痕がみられる。底部は窪切り痕が残る。体部下端は指頭によつてなでている。胎土焼成とともに良好であり、灰色を呈する。

(4) 全体の五分の一ほどの破片である。外面には成形のきいの稜が四段ほどみられ、全面にロクロ成形による横走痕がみられる。底部は切り離しのうちに廻転窓削りを行なっている。胎土は普通であるが、焼成は悪くもろい。色調は灰白色を呈する。

(5) 全面にロクロ成形による横走痕がみられる。底部は切り離しのうちに廻転窓削りを行ない。そのうちに高台を貼り付けている。胎土焼成とともに良好であり、淡青灰色を呈する。

(6) ロクロ成形による横走痕がみられる。切り離しのうちに高台を貼り付けている。高台の端部は窓削りが施されている。胎土は砂粒の混入が多いが良好である。焼成も良好であり、



第22图 7号住居址出土遗物实测图

堅く、淡灰色を呈する。

(12)、底部のみの破片であり、糸切り痕が明瞭に残る。胎土焼成とともに良好であり、青灰色を呈する。

蓋形土器（7）ツマミを中心とした全体の五分の一ほどの破片である。ツマミの周囲は成形のうちに一段の廻転窓削りが行なわれている。内面には成形のさいの凹凸が渦巻状にみられる。また「大」の字の墨書きがみられる。胎土焼成とともに良好で、淡青灰色を呈する。

鉢形土器（8）小破片である。外面は口縁部に横ナデがみられ、それ以下の残存部には平行叩き目痕がみられる。輪積み成形の痕跡が一段みられる。内面は器面の荒れが著しく、整形痕は不明である。胎土は砂質であり、小石の混入が若干みられ、良好ではない。焼成は不良であり、磨耗が著しい。

長頸壺（9）胴下部の三分の一ほどの破片である。外面は胴部下端付近で二段の窓削りが行なわれている。底部は切り離しのうちに廻転窓削りを行ない、そのうちに高台を貼り付けている。内面は凹凸が著しく、成形のさいの輪積み痕が三段みられる。胎土焼成はきわめて良好であり、灰黒色を呈する。

甕形上器（10）外面は横位および斜位の窓削りが顕著に行なわれている。窓は右から左に移動している。内面は凹凸が著しいが、接合痕はナデによって消されている。胎土は砂粒の混入が多く不良であり、焼成も不良である。灰綠色を呈する。

瓦（11）表面には布目痕がみられる。器面の荒れが著しく、二次加熱が考えられている。

8号住居址

東側にある住宅の区画の最南端にある住居址で、隣接して円形廻溝造構と、それと切合う4号井戸がある。住居址の規模は東壁長4.1m、西壁長4.1m、南壁長4.1m、北壁長4.2mと正方

形に近い平面プランを持ち、住居址の深さは、ローム上面までであるが、東壁、西壁で約50cm、南壁では約60cmを測する。

北東コーナーの部分に掘り込みがあり張出しているように感じられるが、この掘り込みは後世のものと思われる。床面は全体的に踏しまられて固くなっている。周囲には周溝は認められないが、北西コーナーを除く各コーナー部には窪みがある。それらのうち北東コーナーのカマドの東にあるものは貯蔵用のピットと考えられるが、他のコーナーのものは床面中央部に較べると若干腐蝕化しているため掘り下げるとき褐色土とロームブロックの混入上で埋められている状態であった。この落ち込みが、人為的なものか、柔らかいために腐蝕化が進んだものか、迷うところであるが後者の可能性が強いように思われる。

柱穴は前述してきた住居址と異って住居址外には認められず、全て住居内で確認されていて発見されている。a～dまでの4柱穴が主柱穴で深さは45cm～52cmで、深く、しっかりしたピットで柱間はピットの中心間でa-b間、b-c間、c-d間は2.2m、d-a間は2.25mであり、等間隔に近い。eピットはb-c間の南壁から45cmの地点にあるピットで、使用目的については、前述したように入口に設けられた階段を受け止めるためピットの可能性が強いと思われる。

住居址内からの出土遺物は少なく、床面上からは形態の判別できない上師器片3片だけである。浮の状態では土師器の壺（第25図2、3）、須恵器の壺（同図5）、またカマドの焼土中から土師器の壺（同図1）袖から須恵器の壺（同図4）が出土している。

カマド 北壁中央部に構築しており、壁外の掘り込みは三角形を呈し、東西1.5m、南北70cmを測する。火床部の掘り込みは東西1.8m、南北70cmと幅広く掘られているが、その上に黒

色土とロームブロックの混入土を張って整形している。袖、燃焼部、煙道は白色粘土を使用して構築しているが、袖部の形状ははっきりせず不明である。燃焼部から煙道にかけては多くの焼土、木炭が認められた。

出土遺物（第25図）

本址の遺物は全て覆土からの出土であり、床面からの出土はみられない。

土師器・変形土器（1）

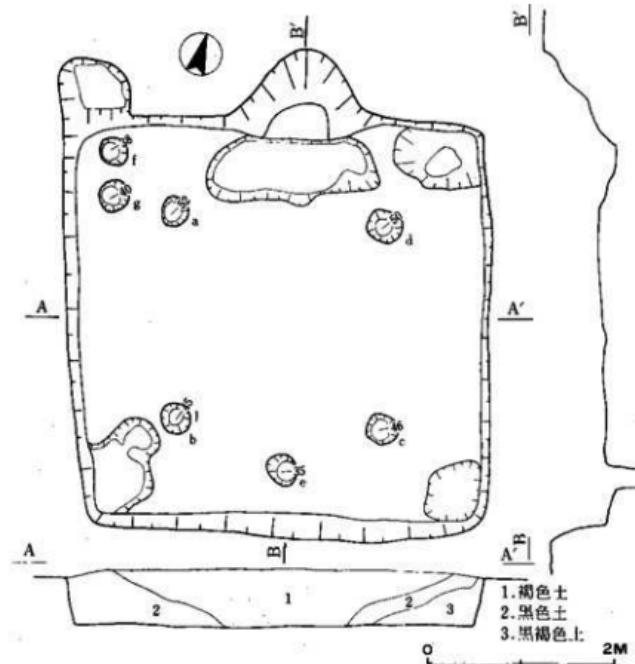
カマドの焼土中からの出土であり、約三分の一ほどの破片である。内外面ともに胴部上半に輪積み痕が二段みられる。外面は縦位の篦削りを行なったのちに口縁部下端から頸部にかけて横位の篦削りを行なっている。内面は横位の篦削りを行なっている。内面は横位の篦削りを行なっている。

行なったのちに口縁部から頸部にかけて横位の篦削りを行なっている。胎土は砂粒の混入が多く不良である。焼成も悪く軟弱である。色調は口縁部から頸部にかけては褐色を呈するが、それ以下は明茶色を呈しており、二次加熱の可能性が考えられる。

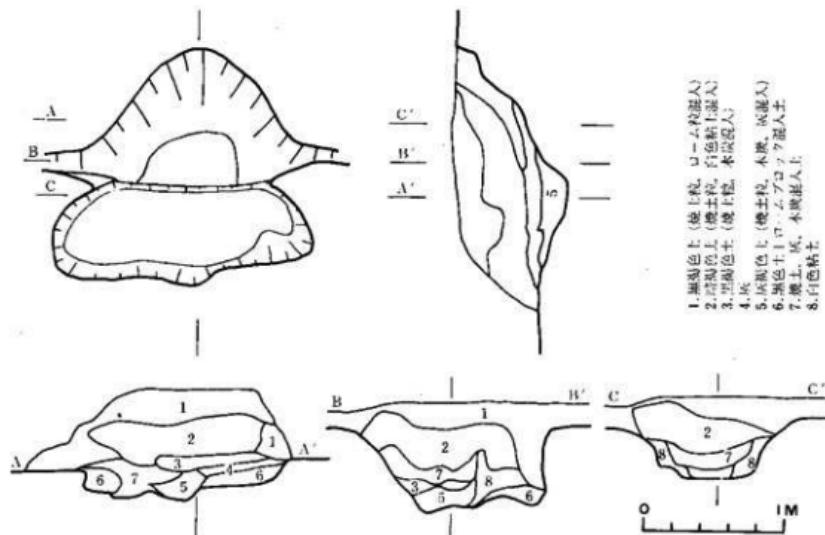
环形土器（2、3）

（2）、覆土からの出土である。約四分の一ほどの破片である。外面は横位の篦削りを行なったのちに篦磨きが施されている。内面も篦磨きが行なわれている。胎土は精撰されており、きわめて良好である。焼成も良好であり、淡茶色を呈する。

（3）、覆土からの出土であり、小破片である。外面は横位および斜位の篦削りを行なった



第23図 8号住居址実測図



第24図 8号住居址カマド実測図

のちに口縁部に横ナデを施こしている。内面は全面に横位および斜位の範磨きを施こしている。胎土は若干の砂粒が混入するが比較的良好である。焼成は良好であり、色調は明茶色を呈する。須恵器・环形土器(4, 5)

(4), カマドの袖からの出上であり、口縁部から体部にかけての大半を欠損する。外面は体部下端に範削りを行なっている。底部は切り離しのうちに迴転範削りを行ない、そのうちに高台を貼り付けている。内面は成形のさいの凹凸が若干みられる。胎土焼成とともに良好であり、淡灰色を呈する。

(5), 約五分の一ほどの破片である。外面はロクロ成形のさいの横走痕がみられる。底部は切り離しのうちに迴転範削りを行ない、そのうちに高台を貼り付けている。体部下端は範削りが行なわれている。内面は成形のさいの凹凸がみられる。胎土は小石の混入が目立ち、良好ではない。焼成は良好であり、灰色を呈する。

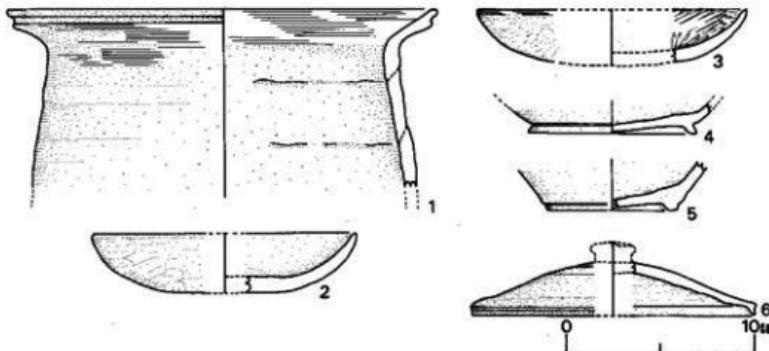
蓋形土器(6) カマドの袖からの出上であ

る。ツマミを欠損し、約四分の一ほどの破片である。外面は成形のうちにツマミの周囲に二段の迴転範削りを施こしている。全面にロクロ成形のさいの凹凸が三段ほどみられる。胎土は砂粒および小石の混入が若干みられ、良好ではない。焼成は良好であり、淡灰色を呈する。

9号住居址

8号住居址の北々東7mの地点にある住居址である。住居址の規模は東壁長5m、西壁長4.9m、南壁長4.6m、北壁長4.6mを測し、南北が約40cm長い長方形を呈する。南北に長い住居址は本住居址だけである。住居址の壁高は各壁ともローム層を60cm~70cm掘り下げている。西壁のやや北に寄った部分に約40cm程外側への張出しが認められる。この部分には粘土混入黑色土の焼成化したものがあったので精査したが、カマドと断定することはできなかった。

床面は中央部は踏み固められているので安定した平坦面になっているが、周辺部は凹凸が目



第25図 8号住居址出土遺物実測図

立つ。南壁と西壁に周溝と思われる掘り込みが認められ、南壁で幅10cm～15cm、深さ6cm、西壁で幅40cm、深さ15cmである。床面中央部に東西幅40cm、南北長65cm、深さ18cmの長方形の掘り込みが確認されている。埋土を見ると最下層が腐蝕土、その上にロームブロック、上面に焼土と灰の混入層が厚さ約7cm堆積している。この掘り込みの性格については、住居址の中央にあり、焼土、灰が堆積していることから炉が切られていた可能性が考えられる。

柱穴は全て住居址内にあり、主柱穴はa～dの4ピットであるが、太い木材を使用したと思われ、各ピット共も大きく、深い。また各ピット共、柱穴が2本ずつ南北に並ぶように掘られているが注目され、柱の代替が行なわれたか、柱の最も腐蝕しやすい部分は湿度の違いから床面に接する部分であるため、腐蝕した部分を補強するために主柱に接して新たな柱穴を掘り柱を埋めたかのどちらかと思われる。

各柱穴の間隔は共に2.5m前後であったろうと思われる。つまり、b～c間は南北どちらのピットをとっても約2.5m、a～d間は南にあるピットで2.3m、北ピットで2.5mを測する。また、a～b間、c～d間は4ピット共北側に

あるピット間をとっても、南側のピット間をとっても約2.5mとなる。

主柱4本を新しい柱と取り替えることは上屋の構造を考えると困難であると思われる。すると、補強柱を使用と考えるのが適切である。すると、各ピット共南側にあるピットが小規模であり、b、cのピットは浅い点を考えると、主柱穴は各ピット共北側のピットであり、柱間は2.5m前後となる。

カマド 北壁中央部にあり、壁外の掘り込みは8号住居跡と同様、平面形は三角形を呈する。火床面の掘り込みは深さ約10cmであるが、東側の立上りがはっきりしない。袖、燃焼部煙道は白色粘土を使用して構築している。西袖部は長さ約50cmであるが、東袖部の白粘土は確認できない。燃焼部から煙道内には多くの焼土が充填されている。

出土遺物（第28、29図）

覆土の出土遺物（第28図）

土師器・斐形土器（1）

全体の五分の一ほどの破片である。外面は口縁部下端から頸部にかけて横ナデが行なわれ、それ以下は縦位の竪ナデが行なわれている。内

面は全面に横位の窓ナデがなされている。また輪積み痕が一段みられる。胎土は砂粒の混入が多く良好ではないが、焼成は良好であり、淡茶褐色を呈する。

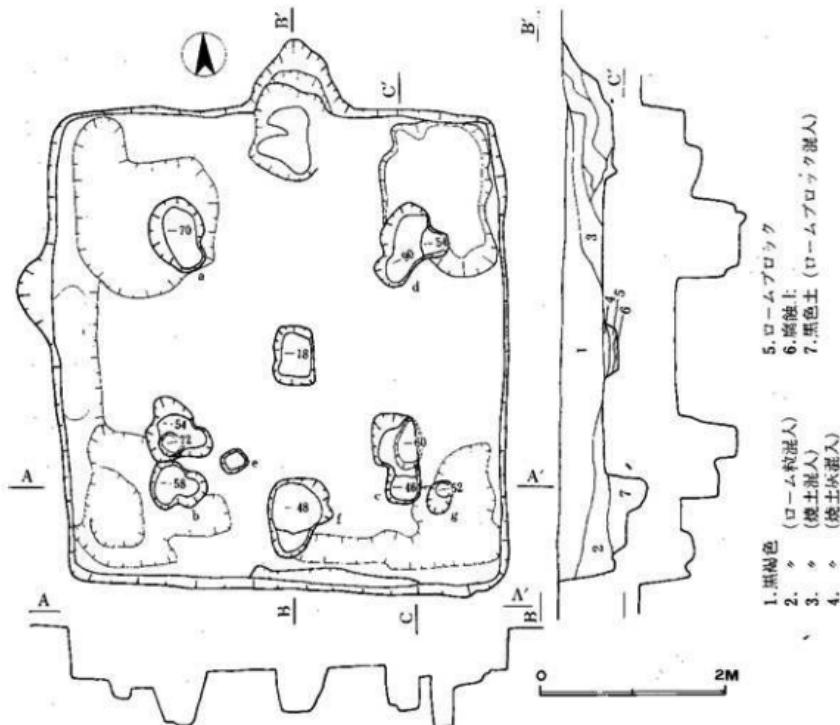
壺形土器（3, 4, 5, 6）

(3), 約四分の一ほどの破片である。外面は口縁部に横窓ナデが施こされている。体部は成形のさいの指頭による凹凸が著しく残る。内面はほぼ全面に窓磨きが施こされていたようであるが、器面の剥落が著しく、部分的にしか残っていない。

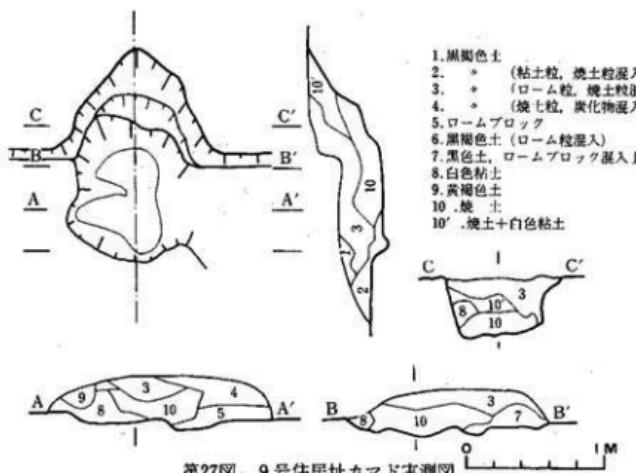
(4, 5, 6), 第9号住居址の西壁を切って掘られたピットの中から出土したものである。三片ともに壺形土器の底部であり、明瞭な糸切り痕を残している。内面は黒色を呈し、窓磨きが行なわれている。胎土焼成とともに三片とも良好であり、淡黄色を呈している。

須恵器・壺形土器（2）

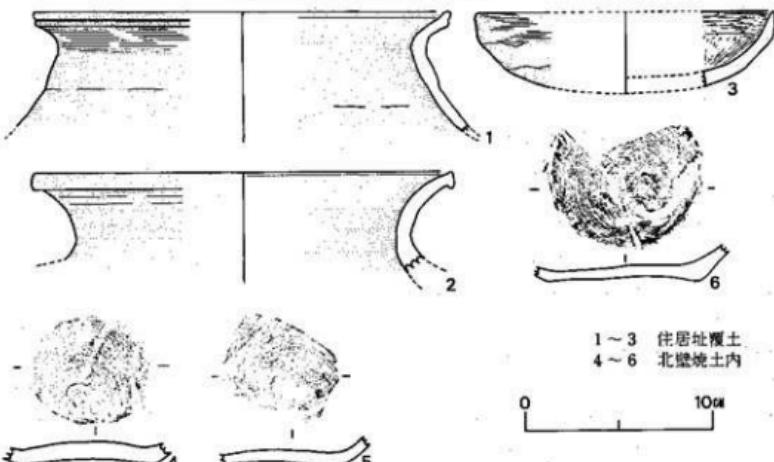
口縁部から頸部にかけての約六分の一ほどの破片である。外面は全面に横走痕がみられる。内面は頸部に若干の輪積み痕がみられる。胎土は良好であるが、焼成は不良であり、淡黄色を



第26図 9号住居址実測図



第27図 9号住居址カマド実測図



第28図 9号住居址覆土出土遺物実測図

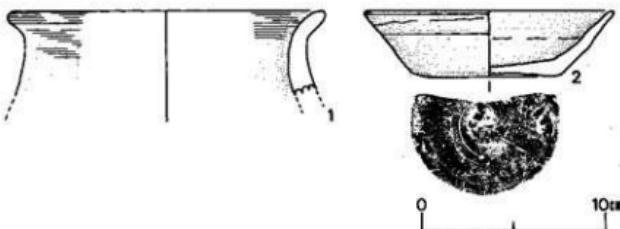
呈する。

床面の出土遺物（第29図）

土師器・變形土器（1）

カマドの焼土中から出土したもので、全體の五分の一ほどの破片である。外面は頸部以下に縦位の籠ナデを行ない、その中に口縁部から

頸部にかけての横ナデを行なっている。内面は頸部の接合痕を籠削りによって消したのちに口縁部から頸部にかけての横ナデを施こし、その中に縦位の籠ナデを行なっている。胎土、焼成ともに良好であり、色調は淡茶色を呈している。



第29図 9号住居址床面出土遺物実測図

須恵器・环形土器（2）

約二分の一の破片である。外面は口縁部直下に成形のさいの巻き上げ痕が若干みられる。底部はハラ切りのままである。内面にも体部下位に成形のさいの巻き上げ痕が若干みられる。胎土、焼成ともにきわめて良好であり、青灰色を呈する。

10号住居址

9号住居址の北9mの地点にある住居址である。住居址の規模は東壁長4.7m、西壁長4.6m、南壁長4.8m、北壁長4.95mで、わずかに東西に長く、隅丸方形的な平面プランをもつ住居址で、壁高は、ローム層下50cm、ローム漸層が8cm、旧表土が12cmと確認されているので70cmの高さになる。

床面は全体的に見ると、よく踏み固められているが、北東コーナーを除く各コーナーには窪みがあり、南東および南西コーナーは深さ約15cm、北東コーナー部にあるものは約20cmを測する。周溝は北壁カマド西側、西壁、南壁と東壁の中央部に認められ、深さは6cm～8cm、幅は10cm～15cmである。また、周溝が各コーナー部と南壁寄りの中央にあるピット周囲には認められない点が注目される。カマドの周囲の床面には焼土、灰、粘土が東西1.7m、南北2mの範囲にわたり堆積しているのが確認されている。

柱穴は住居址内にだけ認められる。主柱穴は

a-dの4ピットであり、9号住居址同様、補強柱用のピットと考えられるものが外側に掘られており、南北に2柱穴が並ぶ形になる。それでは南北どちらの柱穴が主柱穴かという点であるが、a、dのピットは北側の柱穴が東西の壁際にある支柱穴と考えられるe、fの柱穴と一直線上に並び、またaピットでは深さが80cmと深く掘られている点を考えると北側が主柱穴と考えられる。b、cピットは南側にある柱穴の方が規模が大で、若干深く掘られており、また柱間を考えると南側が主柱穴と考えられる。すると、柱間は、a-d間、b-c間が2.7m、a-d間、b-c間が2.5mとなる。

gのピットは、入口の階段用のピットであろう。

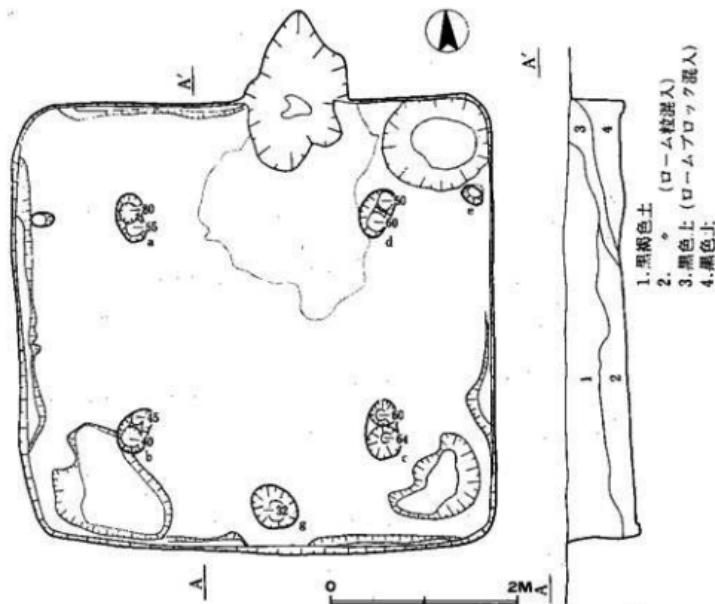
カマド 北壁中央部からやや東寄り地点にあり、壁外の掘り込みは90cm（南北）×110cm（東西）、煙道の傾斜は30°である。西袖は白色粘土を使用して作られているが、東袖は壁寄りの部分に焼けた白色粘土が認められた程度で、はっきりしない。燃焼部と煙道には焼けて固くなった白色粘土の壁が残っている。

出土遺物（第32図）

本址の出土遺物は全て覆土中からのものであり、床面からの出土遺物は全くない。

土師器・环形土器（1、2）

（1），外面は肩部以下に縦位の鋸削りを行



第30図 10号住居址実測図

なったのちに、口縁部から肩部付近まで横ナデを行ない、そののちに肩部以下の胴部に縱位の箆ナデを行なっている。内面は口縁部に横ナデ、胴部に横位の箆ナデを行なっている。胎土は小石を多く含み不良である。焼成は普通であるが、胎土の粗悪さのために器体はもろい。色調は淡茶色を呈する。

(2)、胴下半部を欠損する。外面は肩部以下に縱位の箆削りを行ない、そののちに口縁部から肩部にかけて横ナデを施こしている。内面は口縁部に横ナデを施こし、胴部は横位の箆ナデを行なっているが、輪積み痕が八段ほどみられる。胎土は小石、砂粒の混入が多く不良である。焼成も悪くもろい。淡黄褐色を呈している。

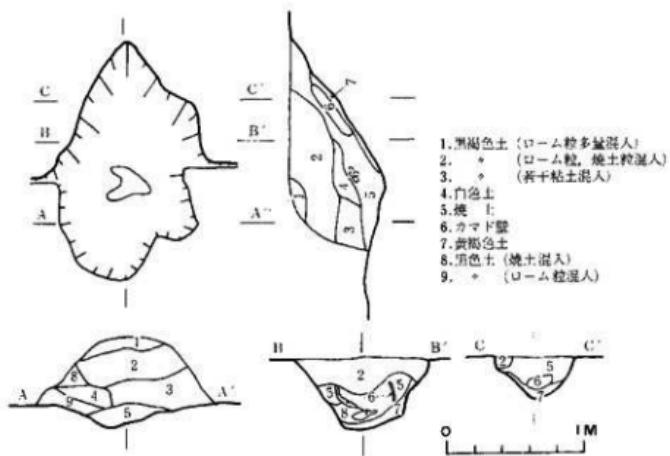
环形土器(3)、全体の約三分の一ほどの破片である。外面は体部に横位の箆削りを行ない、そののちに口縁部に横ナデを施こしている。内面は口縁部から底部まで横位および斜位の箆磨

きを施こしている。胎土、焼成ともに良好であり、堅くしまりがある。色調は口縁部および胴部上半は黒褐色、他は明茶色を呈する。

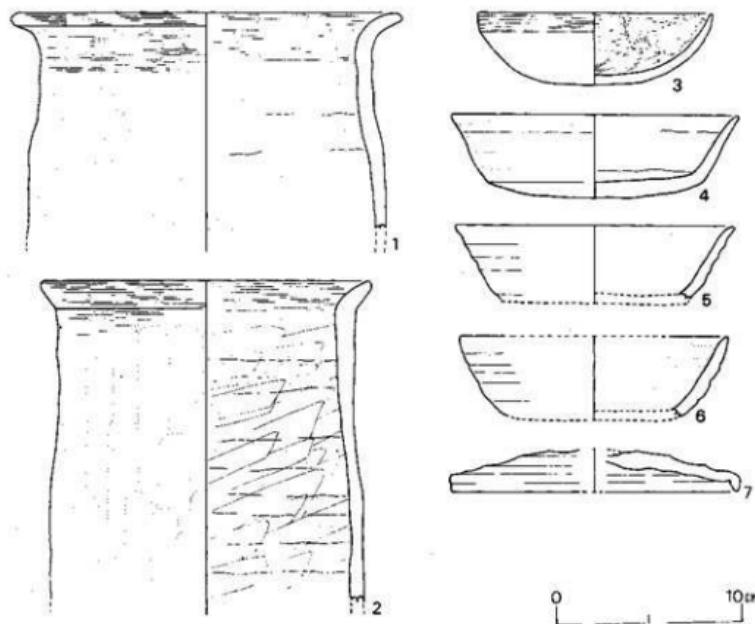
(4)、底部と体部の一部が残っている。外面は口縁部から体部中位までロクロ成形による横走痕がみられ、体部下半には横位の箆削りがみられる。底部は切り離しののちに迴転箆削りを行なっている。内面の体部上位には接合痕と思われる筋が一段みられ、底面には成形のさいの渦巻状の凹凸がみられる。胎土は多量の砂が混入して不良であるが、焼成は比較的良好である。淡黄褐色を呈する。

須恵器・环形土器(5)、(6)

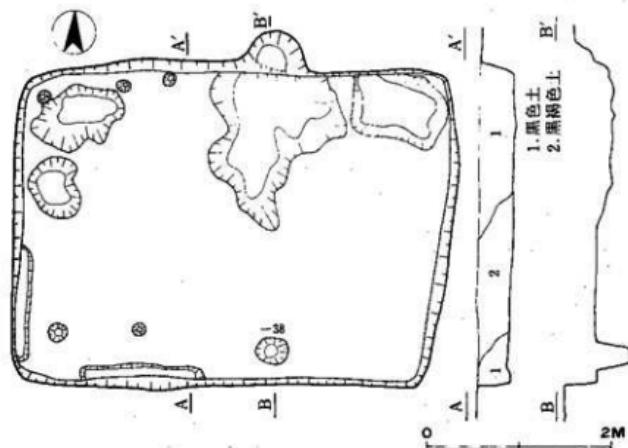
体部の破片である。内外面とともにロクロ成形のさいの横走痕がみられる。また外面には数段の稜がみられる。(6)は体部下端に迴転箆削りを施こしているが、(5)は不明である。两者ともに胎土、焼成良好であり、青灰色を呈す



第31図 10号住居址カマド実測図



第32図 10号住居址出土遺物実測図



第33図 11号住居址実測図

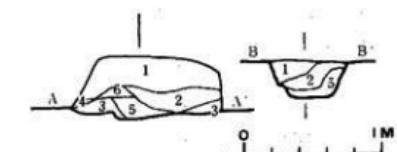
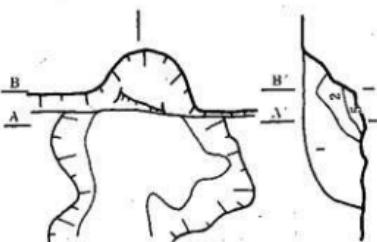
る。

蓋形土器（7） 約五分の一ほどの破片である。内外面ともに成形のきい凹凸がみられる。外面は成形ののちツマミの周囲に二段の廻転範削りを行なっている。胎土は小石の混入が多く不良であるが、焼成は比較的良好である。

11号住居址

10号住居址の北に隣接している、10号の北壁と11号の南壁との間隔は2.5mである。住居址の規模は、東壁長および西壁長は3.3m、南壁長4.4m、北壁長4.6mを測し、東西に長い長方形を呈する。壁高はローム層下約30cmを測する。

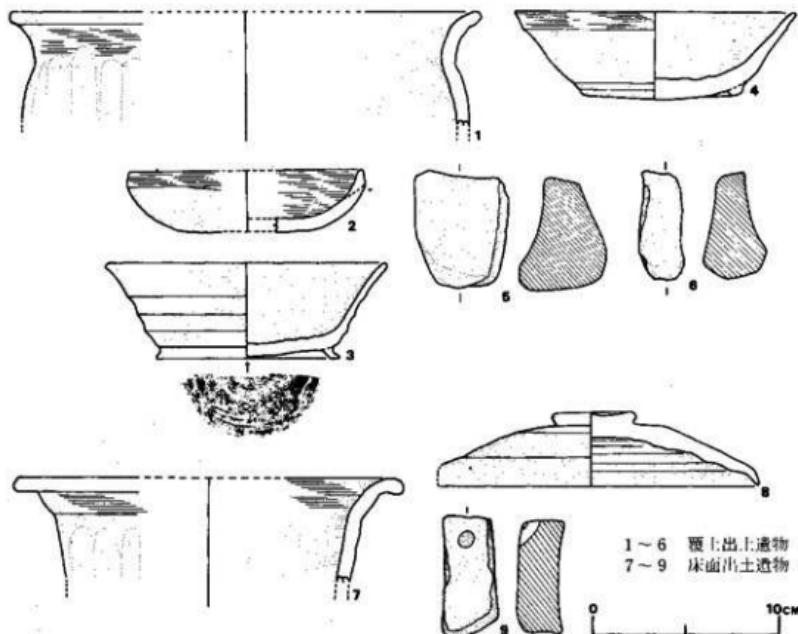
床面はそれほど固く踏み固められた感じはない。北東および北西コーナーの部分に浅い窪みが認められ、深さは北東コーナー部で10cm、北西コーナー部で15cmである。また西壁および南壁の南西コーナー寄りの部分に周溝の一部かと思われる浅い溝があり、幅は約15cm、深さは6



第34図 11号住居址カマド実測図

cm～8cmである。

柱穴であるが主柱穴と考えられるものは確認されなかった。上屋の構築に関連のあると考えられる柱穴は、北壁のカマドの西側の壁に接するようにして3柱穴、また南西コーナー部の南



第35図 11号住居址出土遺物実測図

壁から50cm離れた地点に2柱があるだけである。いずれも小規模で直径14cm～20cm深さは20cm前後である。住居外には柱穴と考えられるピットは確認されていない。

南壁の中央より若干東に寄った地点に長径35cm、深さ38cmのピットがある。

カマド 北壁中央部から40cm東の地点に構築しており、壁外の掘り込みは小規模で35cm（南北）×70cm（東西）。煙道の立上りは50°と急傾斜である。火床面の周囲は南北に長い不整形の浅い窪みとなっている。カマド内には焼土粒が多く認められるが、カマド本体は西袖部の一部に白色粘土が確認されただけで構築状態は不明である。

出土遺物（第35図）

覆土の出土遺物

上師器・菱形上器（1）

口縁部から胴部上半にかけての破片である。外面は口縁部から肩部にかけて横ナデ、肩部以下の胴部には継位の鉈削りが行なわれている。内面は口縁部から肩部まで横ナデ、それ以下は継位の露ナデを行なっている。胎土は小石の混入が多く不良であるが、焼成は良好であり、堅い明茶色を呈する。

环形土器（2） 外面は口縁部に横ナデ、体部には横位の鉈削りが行なわれている。また口縁部直下には接合痕が一段みられる。内面は口縁部から底面までナデ調整がなされている。胎土焼成とともに良好であり、淡茶色を呈する。

須恵器・环球形土器（3、4）

（3），約二分の一の破片である。内外面ともにロクロ成形のさいの横走痕がみられる。また外面には三段の稜がみられる。底部は切り離しのうちに廻転箇削りを行ない、そのうちに高台を貼り付けている。胎土焼成とともに良好であり、暗灰色を呈する。

（4）。体部および高台の一部を欠損する。外面にロクロ成形のさいの横走痕が部分的にみられる。底面には成形のさいの渦巻状の凹凸がみられる。全体に磨耗が著しい。胎土、焼成とともに悪く、もろい。灰白色を呈する。

砾石（5、6） 両者ともに中央部付近から折れたようであり、端部は丸みをもち、使用頻度が高かったことを思わせる。

床面の出土遺物

上飾器・环球形土器（7）

口縁部から胴部にかけての破片である。外面は口縁部から頸部までに横ナデを施こし、それ以下の胴部には継位の箇削りを行なっている。箇は胴部から口縁部方向に移動している。内面は口縁部から肩部付近まで横ナデを行ない、そのうちに棒状と思われる工具によって頸部内面を再整形している。胴部には横位の箇ナデが行なわれている。胎土、焼成とともに比較的良好であり、淡黄褐色を呈する。

須恵器・蓋形土器（8）

口縁部を若干欠損している。外面は成形のうちにツマミの周囲に一段の廻転箇削りを行なっている。内面は成形のさいの凹凸が多くみられる。胎土には小石の混入が若干みられ、良好ではない。焼成も不良であり、やわらかくもろい。淡灰色を呈している。

砾石（9） 完成品である。片面の端部の角が穿孔されており、穿孔されていない面のみが使用されている。紐を通して持ち歩きしたものと思われる。

12号住居址

11号住居址の北22mの地点にある住居址である。住居址の規模は東壁長3.3m、西壁長3.25m、南壁長4.9m、北壁長4.7mを測し、東西に長く、コーナー部が若干隅丸形を呈する平面形である。壁高はローム層を約40cm掘り込んで作っているが旧表上、ローム漸移層を含めると、さらに高くなる。

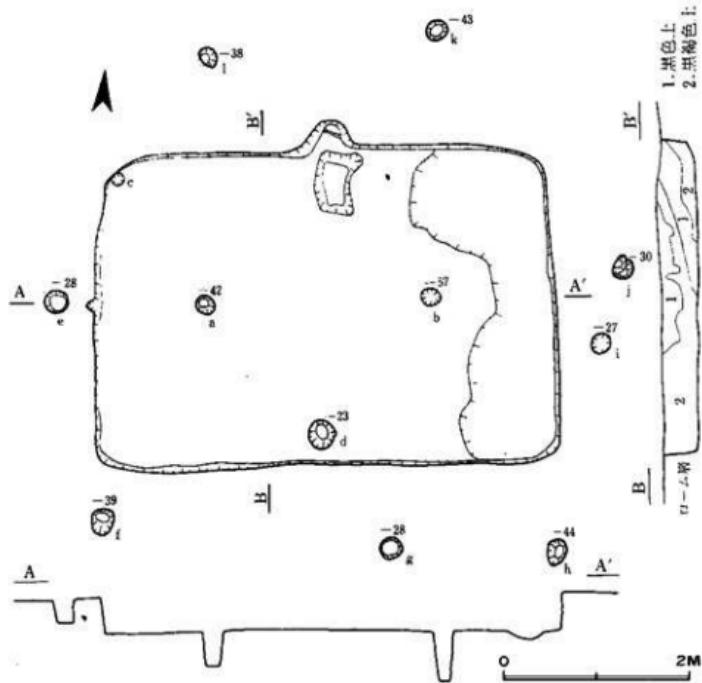
床面は全体的には踏み固められているが東壁の部分は柔らかく窪んだ状態になっている。また、周溝のような掘り込みは確認されていない。

柱穴は住居址の内外に認められる。住居址内には4ピットあり、a、bは主柱穴で柱間は2.5mである。dピットは入口の階段用のピットであろう。北西コーナーに小ピットがあるが壁際には、このピットだけなので用途については断定できない。

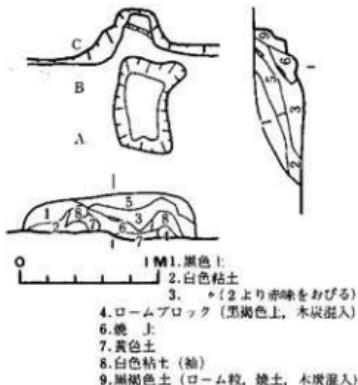
住居址外のピットであるが、まず、主柱穴a、bと間連のある柱穴はeとjおよびiである。eはa、bの柱穴と一直線上にあり、jとiは北および南にずれているが、直線上に近いjの方が関連性があるように思われる。a、b、e、jの柱穴は棟持柱の柱穴と考えられる。

南壁外にはf、g、hの3柱穴があり、これらの柱穴は南側の棟を支えるため柱の柱穴と思われる。同様に北壁外にはk、lの2柱穴がある。

カマド 北壁の中央部にあり、壁外の掘り込みは30cm（南北）×60cm（東西）の規模で2段に掘られている。火床部には40cm×66cmの長方形の浅い掘り込みがある。袖部の遺存状態は良好で白色粘土を用いており、長さは西袖で50cm、東袖で40cmである。煙道内には焼土が詰まっていたが、土師器の蓋の破片が出土している。



第36図 12号住居址実測図

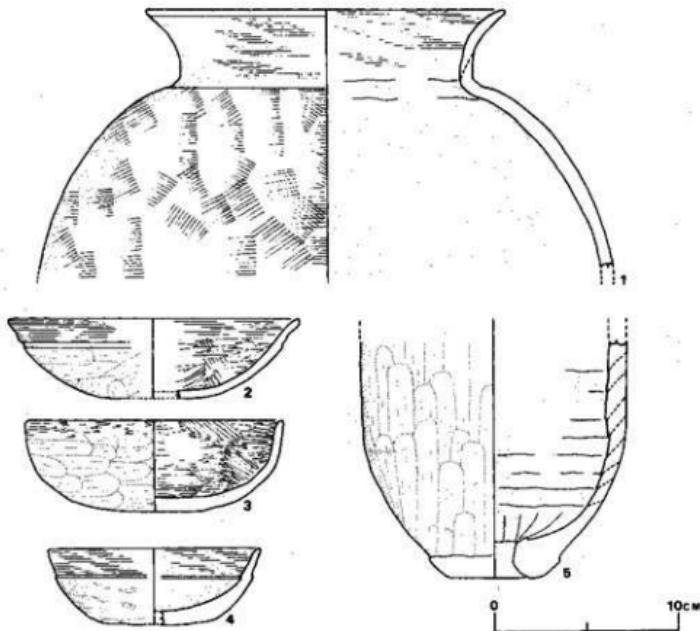


出土遺物（第38、39図）

覆土の出土遺物（第38図）

土師器・瓈形土器（1）

口縁部から胴部上半にかけての破片である。外面は斜位および横位の刷毛目を施したのに、口縁部には横ナデを行ない、さらに箋ナデを行なっている。内面は口縁部に横ナデを施したのに、箋ナデを行なって横ナデ痕を消しているが、部分的に横ナデの痕跡が残っている。また肩部以下の胴部は横位の箋ナデを行なっている。胎土は若干の砂粒を含むが、きわめて良好であり、焼成も良好である。淡黄褐色を呈し



第38図 12号住居址覆土遺物実測図

ている。

環形土器（2, 3, 4）

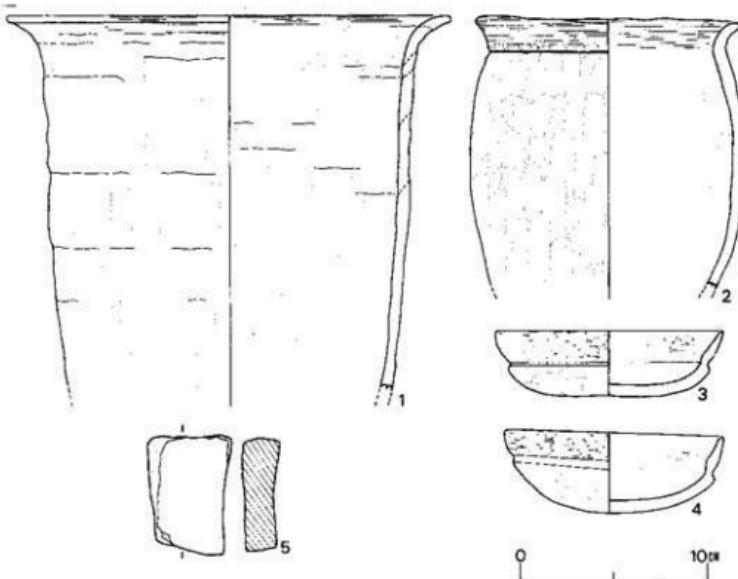
(2), カマドの東側からの出土である。全体の約三分の一ほどの破片である。外面は口縁部に横ナデ、縁以下は複多な方向の箆削りがなされている。内面は口縁部に横ナデを施したのちに底面までの箆磨きが行なわれている。胎土、焼成とともにきわめて良好であり、淡茶褐色を呈する。

(3), 覆土下位からの出土であり、全体の約二分の一ほどが残存している。外面は口縁部には細い箆状工具による調整を、体部には複多な方向の箆削りを施している。また口縁部直下には成形のさいの接合痕が一段みられる。内面はほぼ全面に箆磨きが行なわれている。胎土、

焼成ともに比較的良好であり、淡褐色を呈する。

(4), 全体の約三分の一ほどの破片である。全体に凹凸が著しく、雑なつくりである。外面は口縁部には横ナデが、底部には箆削り痕がみられるだけで、その間は指頭による凹凸が明瞭に残っている。内面は口縁部から底面までナデの痕跡がみられる。胎土、焼成は良好であり、淡灰色を呈する。

傾形土器（5）胴部下半のみが残存している。外面は底部から口縁部方向への縦位の箆削りがみられる。内面は輪積み痕が顕著に残っており、整形の痕跡はみられないが、底面付近には孔を中心とした放射状の箆ナデと思われる痕跡がみられる。孔は外側から内側に向けて穿ったものと思われる。胎土、焼成とともに良好であり、淡



第39図 12号住居址床面出土遺物実測図

黄色を呈する。

床面の出土遺物（第39図）

夔形土器（1, 2）

（1）。カマドの焼土中からの出土である。胴下部を欠損する。内外面ともに輪積み成形の痕跡が顕著にみられる。外面では口縁部には横ナデが、頸部以下には縦位の範ナデが施こされている。範ナデは底部から口縁部方向に行なっている。内面は口縁部に横ナデを行ない、それ以下は横位の範ナデと思われる痕跡が若干みられる。胎土は小石の混入が多く、不良である。焼成は比較的良好である。淡茶褐色を呈する。

（2）。环形土器（3）、（4）に接して検出された。小形夔形土器であり、胴下部を欠損する。外面では口縁部には横ナデが、頸部以下

の胴部には縦位の範削りがみられる。内面は口縁部には横ナデが、胴部には横位の範ナデ痕がみられる。胎土、焼成ともに良好であり、淡茶色を呈している。

环形土器（3, 4）

（3）。外面では口縁部には横位の範磨きが、綫以下は縦位の範削りが施こされている。内面はほぼ全面に横位の範磨きが施こされている。胎土は砂粒の混入が多く不良である。焼成も悪くもろい。茶褐色を呈している。

（4）。外面は口縁部からくびれ部までは横位の範磨きが、綫以下は縦位の範削りが行なわれている。内面は一部に範磨きの痕跡がみられるほかは器面の剥落が著しく、整形痕は不明である。胎土は普通であるが、焼成は悪く軟弱で

ある。明茶褐色を呈する。

砥石（5） 偏平な砥石である。片面が若干摩耗している。

13号住居址

13号住居址及び14号住居は発掘調査終了後、西区の北約20mの地点で工事中発見されたものである。

13号住居址は東西3.2m、南北2.3mの東西に細長い小形の住居址である。各壁はだれた感じ落ち込み、壁高は西及び北壁で40cm、東及び南壁で30cmである。

カマドは北壁中央部から60cm東に寄った地点に構築されており、火床部も東西90cm、南北70cmの規模で掘り込みが認められる。

出土遺物はカマドの燃焼部内から土師器の壊（第41図2）床面からは土師器の甕と壊の破片（同、1, 3）が出土している。

出土遺物（第41図）

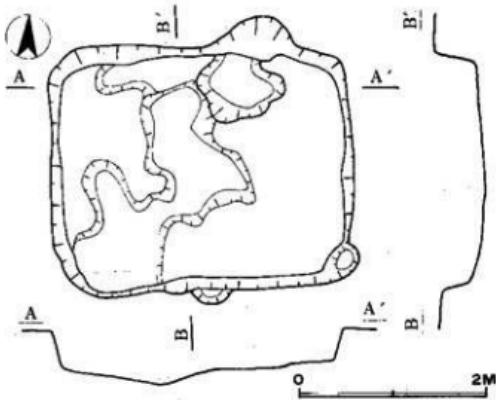
土師器・菱形土器（1）

口縁部から肩部にかけての六分の一ほどの小破片である。内外面とともに口縁部から肩部付近までは

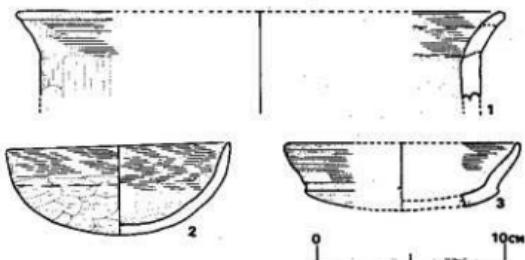
横ナデが施されており、それ以下の外面では継位の箇削り、内面では横位の箇ナデが行なわれている。胎土は普通であるが、焼成は良好であり、明茶色を呈する。

壊形土器（2, 3）

（2） 完成品である。外面は口縁部に横ナデ、口縁部以下底部まで横位の箇削りが行なわれている。また成形のさいの接合痕が一段みられる。内面は全面にナデが行なわれている。胎土は小石の混入が若干みられ、良好ではないが、焼成は良好であり、黄褐色を呈している。



第40図 13号住居址実測図



第41図 13号住居址出土遺物実測図

（3）、全体の約六分の一ほどの破片である。

外面は口縁部から縁までは横ナデが、縁以下は横位の箇削りが行なわれている。内面は口縁部から底面までナデが行なわれている。胎土、焼成とともにきわめて良好である。色調は外面では淡黄褐色、内面は黒褐色を呈している。

14号住居址

13号の西に隣接してあった住居址である。東壁から2.6mの地点までの調査であったため全体の規模は不明であるが、東壁長は3.2m 壁高は東壁及び南壁で60cm、北壁で50cmで測定する。

床面はそれ程踏み固められた様子はない。北東コーナーから東壁中央部にかけてと、南壁中央部に浅い溝みが認められる。ピットは中央部からやや南へ寄った部分に深さ15cmの小ピットが2個と、北壁の北東コーナー寄りに壁に接して1個ある。

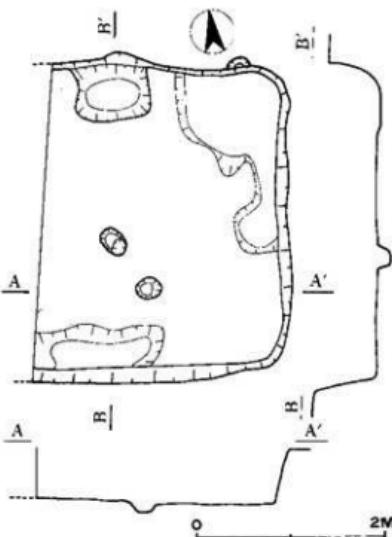
出土遺物は小ピットの東、南東コーナー寄りの地点から浮遊の状態(15cm~40cm)で土師器の甕(第43図1, 2, 4) 瓢(同3) 盆(同5)と須恵器の長颈瓶(第44図2)出土しており、住居址廃絶後、一括して投げ込まれたものと考えられる。

出土遺物(第43, 44図)

土師器・斐形土器(第43図1, 2)

(1) 全体に成形のさいの凹凸が多くみられる。外面は口縁部には横ナデが、胴部には縱位の範削りが、胴部下端には横位の範削りが行なわれており、その中に部分的に縱位の範磨き状の調整を行なっている。底部は一方向の範削りが行なわれている。内面は輪積みの痕跡が六段ほどみられる。整形は口縁部には横ナデが、肩部付近には横位の範削り痕がみられる。またほぼ全面に横位の範ナデ痕もみられる。胎土は小石の混入が多く粗悪である。焼成も悪く軟弱である。淡黄褐色を呈する。

(2) 脇下部を欠損する。外面は口縁部には横ナデが、頸部には若干の横位の範磨きが、胴部上半には部分的な縱位の範磨きが行なわれている。また、部分的に縱位の擦痕がみられる。内面は口縁部には若干の横ナデが、肩部には横位の範削り痕がみられる。胎土は多量の小石を

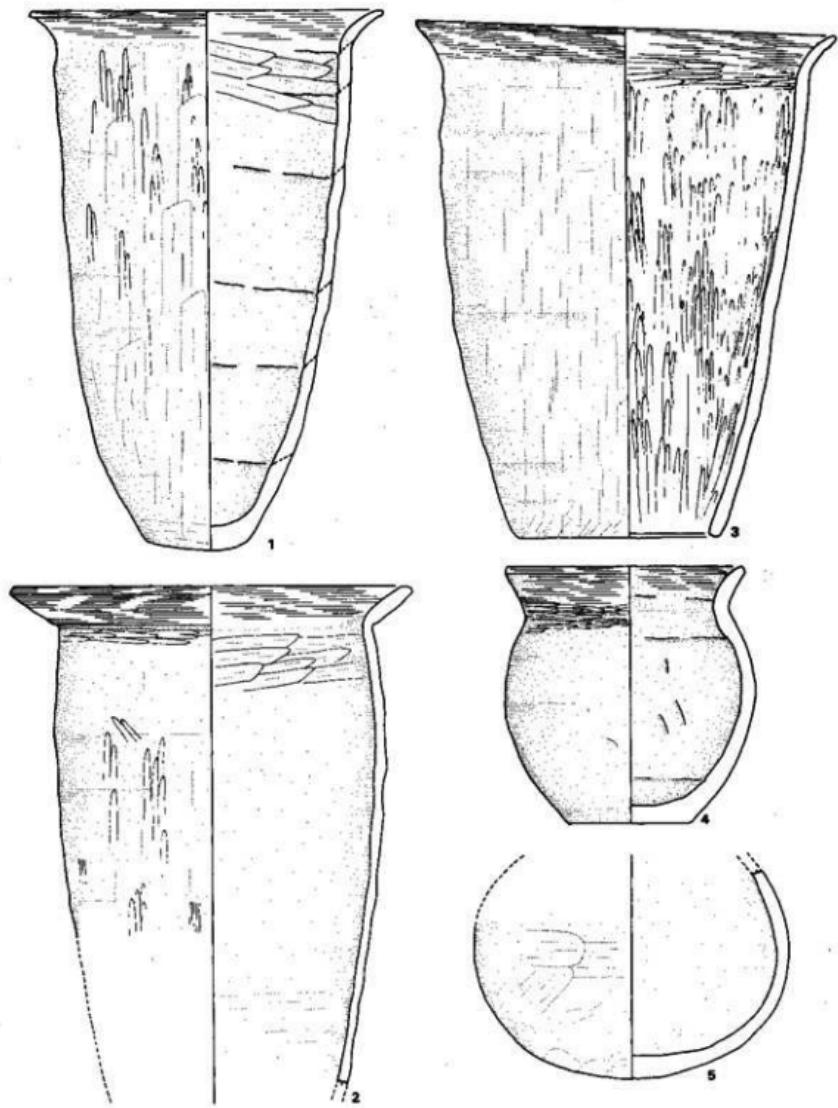


第42図 14号住居址実測図

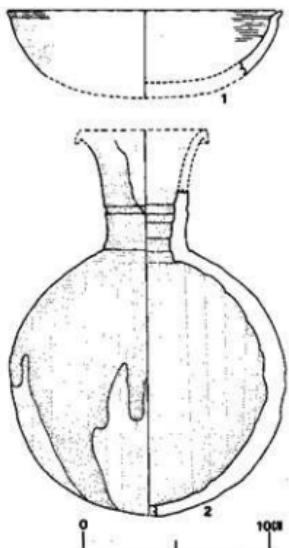
含み粗悪である。焼成も悪く軟弱であり、淡黄褐色を呈する。

小形斐形土器(第43図4) 外面は器面の荒れが著しいが、口縁部には横ナデが、頸部には横位の範磨きが、肩部には縱位の範削り痕が若干みられる。底部も器面の荒れが著しく詳細は不明である。内面には輪積み成形痕が三箇所ほどみられる。整形は口縁部には横ナデが、胴部には横位の範ナデ痕がみられる。胎土、焼成とともに良好であり、淡赤褐色を呈する。

瓶形土器(第43図3) 外面は口縁部には横ナデが、頸部以下は縱位の範削りが、胴部下端では斜位の範削りが行なわれている。内面は口縁部には横ナデが、頸部には横位の範磨きが、頸部以下には縱位の範磨きが行なわれている。また胴部下端では横位あるいは斜位の範ナデが行なわれている。胎土は小石の混入が多く粗悪である。焼成は普通で、淡黄褐色を呈する。



第43図 14号住居址出土遺物実測図(1)



第44図 14号住居址出土遺物実測図(2)

壺形土器（第43図5） 口縁部から肩部にかけてを欠損する。内外面ともに器面の剥落が著しく、外面の胴中位および底部に範削りの痕跡が若干みられるのみである。胎土、焼成とともに良好であり、黄白色を呈する。

壺形土器（第44図1） 口縁部から体部にかけての小破片である。外面は口縁部に横ナデを施したのちに体部の範削りを行なっている。内面は口縁部から体部まで範磨きを行なったのちに全面にナデを施している。胎土、焼成とともに良好であり、淡茶褐色を呈する。

須恵器・長頸瓶（第44図2）

口縁部および胴部の約二分の一を欠損する。緑色の自然釉が頸部から胴部上半に集中的にかかっており、一部は底部まで流れている。釉は一部において黄変し、剥落している部分もみられる。内外面ともに同心円状に成形痕がみられる。胎土、焼成とともに良好であり、器地は青灰色を呈する。

その他の遺構

1. 掘立柱建物跡

1号掘立柱建物跡

5号住居址に南接してあり、南北3間(8m)、東西2間(5.4m)の南北に棟を向ける建物であり、棟の方向はN-14°-Wである。柱間寸法は桁行が3間とも2.65m、梁行が2間とも2.7mを測る。各ピットを見るとP₂、P₅、P₆、P₁₀などが中心から離れるため、はっきり断言できないが、各柱間は9尺として設計されたものと思われる。

中央部には床を支えるための支柱のピットがある。柱の方向はN-18°-Wであり4°さらに離れることになる。柱間は北側の2穴をP₁₁とP₁₂の北ピットとすると東西2.1m(7尺)南北2.4m(8尺)が考えられる。

柱穴の掘り方は南北方向の柱列は南北に長い方形、東西方向の柱列は東西に長い方形にして2段深く掘られている。これは一気に深さ80cm~100cmのピットを掘ることは困難であり、まず30cm~50cmの長方形のピットを掘り、ピットの中に入り、さらに深く掘ったとも考えられる。

柱を埋めた後は、柱の周囲にローム、粘土などを入れながら築き固め、柱を堅固に安定させたと思われ、P₁、P₄には粘土塊が認められた。

出土遺物(頁第47図1)

須恵器・环形土器

外面にはクロ成形のさいの横走痕および稜がみられる。底部は切り離しのうちに廻転窓削りを行ない、それから高台を貼り付けている。体部下端は廻転窓削りを行なっている。内面は底面に若干の凹凸がみられるだけである。胎土、焼成とともにきわめて良好であり、灰かぶりによって灰黒色を呈している。

2号掘立柱建物跡

1号掘立の南に隣接するもので、南北3間(6.3m)、東西2間(3.9m)の南北棟の建物である。棟の方向はN-4°-Wであり、ほぼ南北方向を指す。桁行の柱間は北側の2間が2.3m(7.5尺又は8尺)南の1間が1.8m(6尺)、梁間は1.95m(6.5尺)の等間隔である。中央には支柱の2柱穴(P₅、P₈)がある。

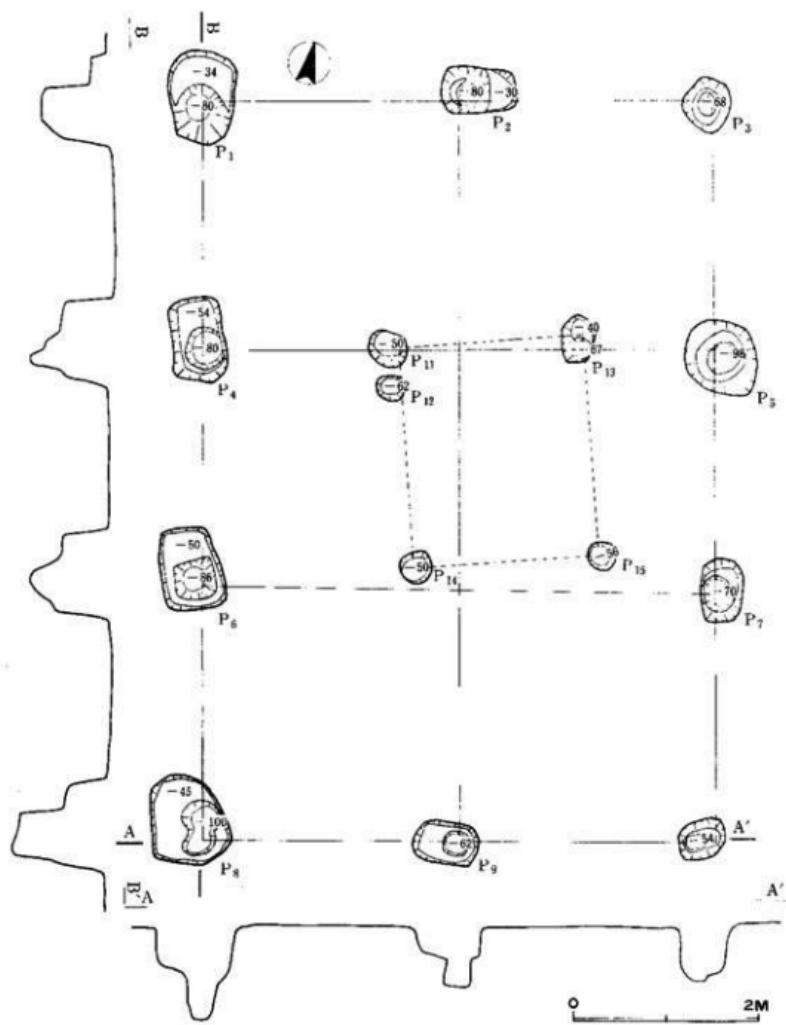
南にあるP₁₀、P₁₁の2柱穴は、北のP₇、P₉との柱間が狭いこと、中間に柱穴がないことを考えると、本来は南北2間、東西2間の建物であり、南の1間は庇を降ろすための柱穴と思われる。またP₁₀から南2mの地点に1号井戸跡があり、木造構との関連は不明であるが、同時期とすれば、この庇のある空間は水を必要とするような仕事の作業場とも考えられる。

2. 井戸跡

西区の北端、6号住居址の北14mの地点に2基、南端の2号掘立遺構の南に隣接して1基、東区の南端、8号住居址の北側、円形周溝遺構と切り合って1基と計4基の井戸跡が発見されている。

1号井戸跡 井戸穴の外側を方形に掘って1段低くした掘り込みを設けている。掘り込みの壁は崩れが大きく明確ではないが東西約2.1m、南北約2mで、壁の深さはローム層下が15cmである。井戸穴の平面形は円形であり、上端の口径は1.7m、方形の掘り込み中心と井戸穴の中心は一致する。井戸穴の上端から西側で1.3m、東側で1mの深さまではロート状に掘られており、それ以下井戸底までは垂直に掘り下げられている。垂直部の平面形は直径1mの円形を呈する。

2号井戸跡 1号井戸跡の南東約1mの地点

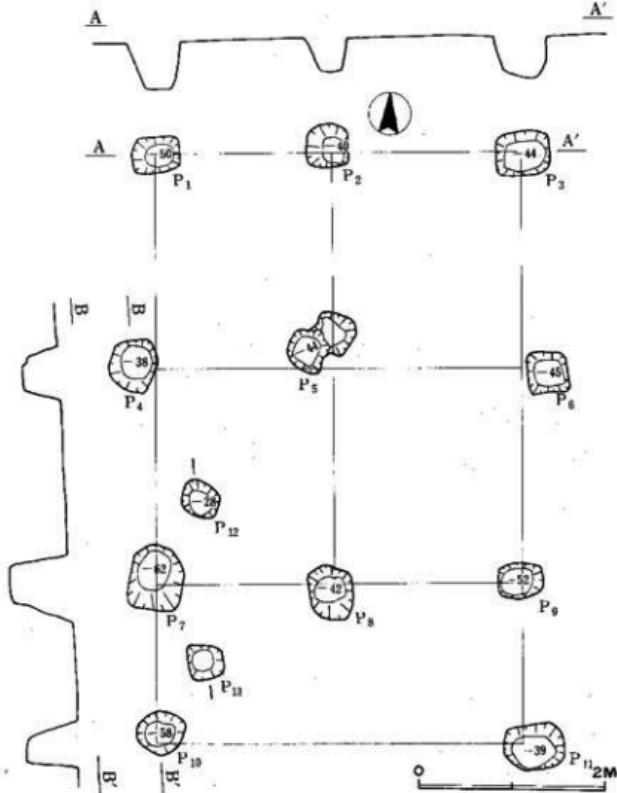


第45図 1号掘立柱建物跡実測図

に隣接する小形の井戸跡である。井戸穴の外側に深い方形の掘り込みがあり、深さは40cm~45cm、規模は西壁に大きな崩れがあるが1辺1.8m前後の正方形である。各コーナー部には窪みがあり柱穴とも考えられる。

井戸穴は上端部で東西65cm、南北70cmであるが、下部にゆくに従い徐々に狭くなり深さ90cmの地点で東西40cm、南北50cmの楕円形となり、この地点から井戸底までは垂直に掘り込まれている。北西コーナーからからは須恵器の环(47図2)が出土している。

3号井戸跡 方形の掘り込みは北壁と東壁が大きく崩れているが、1号井戸跡同様1辺2m前後の正方形と思われる。深さ東壁で20cm、西壁で10cmを測する。井戸穴は東に寄って掘られているように感じられるが、上部のロート状の掘り込みの崩れが大きいため、井戸穴の中心と方形掘り込みの中心は一致する。井戸穴の上端は直径1.7mの不整円形である。上端から1m以下井戸底までは垂直に掘られており、垂直部の平面形は直径90cmの不整円形である。方形掘り込み内からは須恵器の环(第47図3)が出

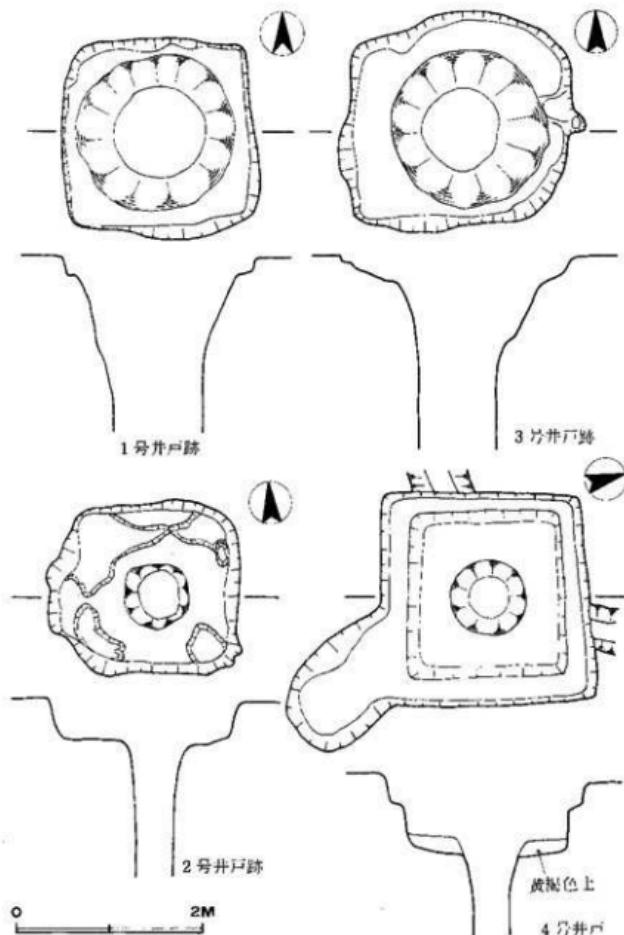


第46図 2号掘立柱建物跡実測図

上している。

4号井戸跡 円形周溝造構を切って構築された井戸跡である。方形の掘り込みは2段に掘られ外側は東西 2.3m、南北 2.2mで若干東壁の变い方形となり、南東コーナーに外側にのびる

幅1mの掘り込みがある。掘り込みの深さは南壁で30cm、北壁で20cm、内側に10cmから20cmの平坦面をつくり、さらに40cmの深さに掘り込んでいる。内側の掘り込みの規模は東西 1.8m、南北 1.7mを測する。



第47図 井戸跡実測図

井戸穴は内側の底面に黄褐色土を約20cm張った後に掘っており、上端で直径80cmの円形、上端から60cm下部で直径40cmの円形となり、それより下部は垂直に掘られている。

井戸跡の規模、構築法からみて、1号井戸跡と3号井戸跡、2号井戸跡と4号井戸跡がそれぞれ同時期に構築されたものであろう。出土遺物から見ると小形の2号井戸跡が古く大形の3号井戸跡が新しく作られたと考えられる。

2号井戸址出土遺物（第47図2）

須恵器・环形土器

内外面ともにロクロ成形のきいの凹凸および横走痕がみられる。底部は斂切りのままであり、「鎌記号」と思われる線がみられる。体部下端には切り離しのちの廻転斂削りの痕跡がみられる。胎土、焼成とともに不良であり、淡青灰色を呈する。

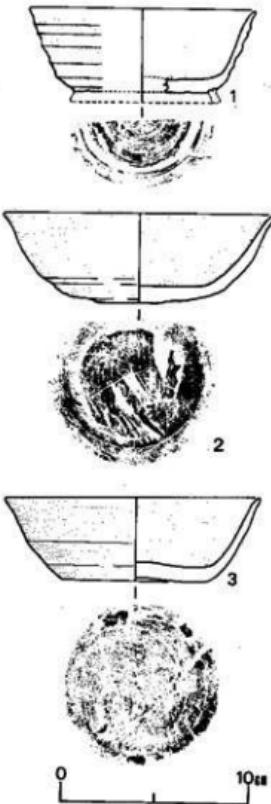
3号井戸址出土遺物（第47図3）

須恵器・环形土器

外面はロクロ成形のうちに体部に斂ナデと思われる整形を行なっている。底部は糸切り痕が残る。内面にはロクロ成形のきいの横走痕がみられる。胎土は、砂粒、小石の混入が多く不良である。焼成も不良であり、灰白色を呈する。全体に摩耗が著しい。

3. 円形周溝遺構

8号住居址北の約1m、4号井戸跡と切り合っている遺構である。規模は東西の外径5m、内径3.9m、南北の外径5.2m、内径4mで円形を呈し、周溝は東側で小規模となり、幅50cm、深さ15cmであるが、他は幅70cm～80cm、深さは20cm～25cmを測する。周溝内には深さ20cm～50cmのピットが4個確認されている。周溝の内側には版築と思われるような土層の堆積も認められず、また土塙のような遺構もなく、遺物の発



第48図

1. 1号掘立建物跡出土遺物

2. 2号井戸跡出土遺物

3. 3号井戸跡出土遺物

見もない。

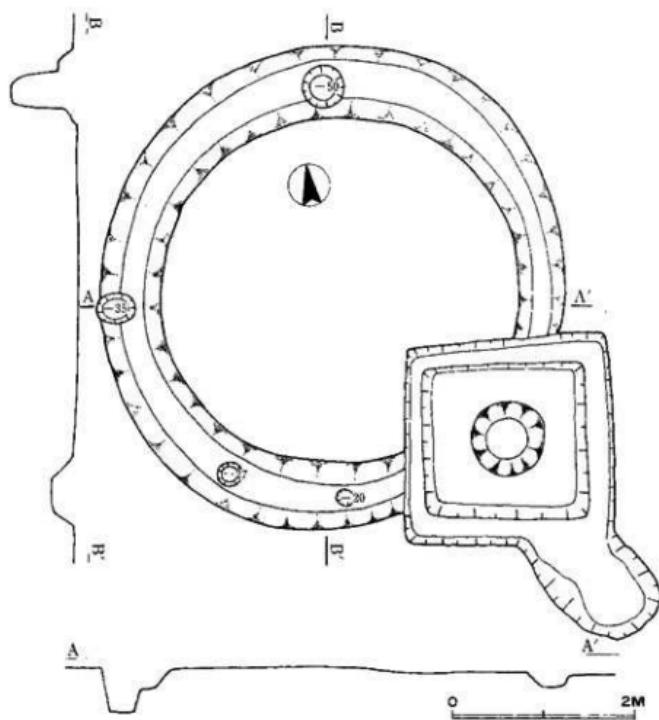
この遺構の性格は不明である。本県では佐野市工業団地内遺跡¹から外円直径18mと14mの2基が発見されているが、内部に遺構の発見はなく、性質不明となっている。また東に隣接する新4号国道建設用地内の発掘調査²でも2基の円形周溝遺構が発見されている。1基の周溝内からは土師器の変形土器が発見され、他の1基は

遺物の発見はないが周溝の外側にピットが並ぶ形態であった。

(1)辰巳四郎他 佐野市工業住宅地内遺跡発掘

調査報告書 栃木県教育委員会 昭和45年

(2)昭和49年～50年に栃木県教育委員会が発掘調査を実施した。



第49図 円形周溝遺構実測図



西区全景



東区全景

图版 2



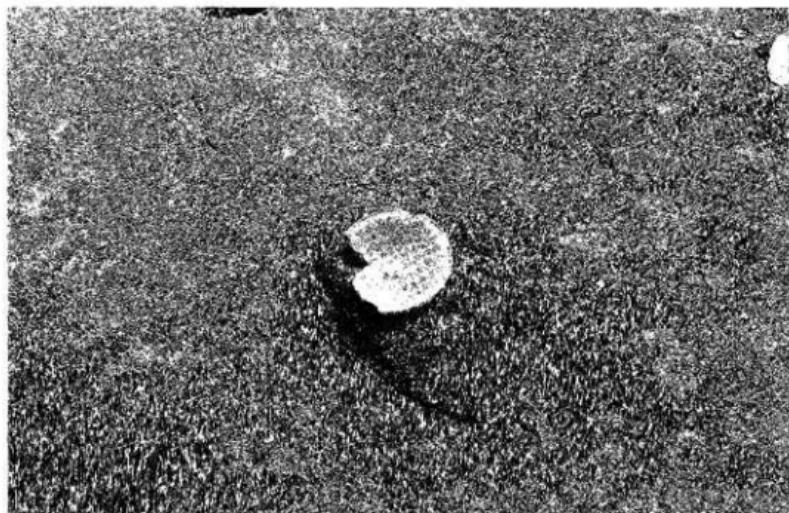
1号住居址全景



2号住居址遺物出土状况

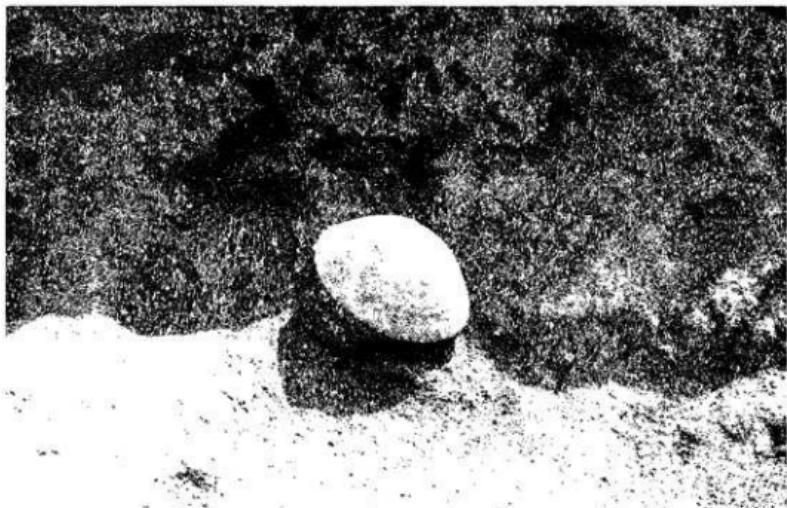


2号住居址環(n)出土状況

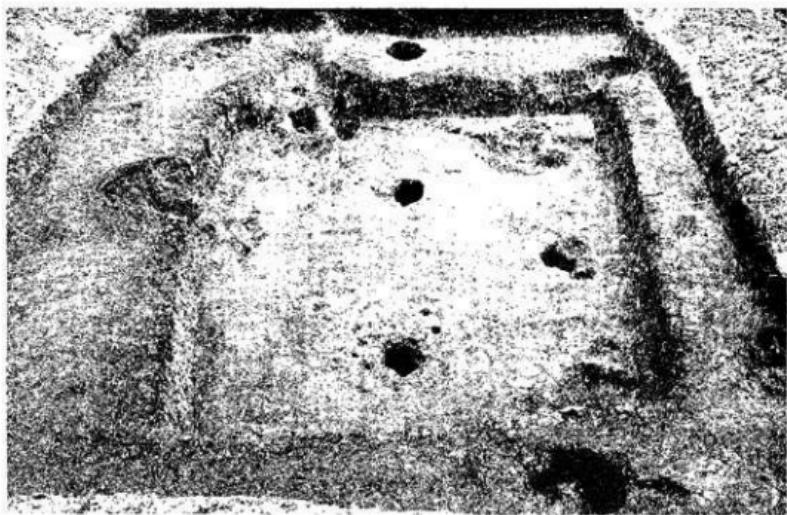


2号住居址蓋(m)出土状況

図版 4

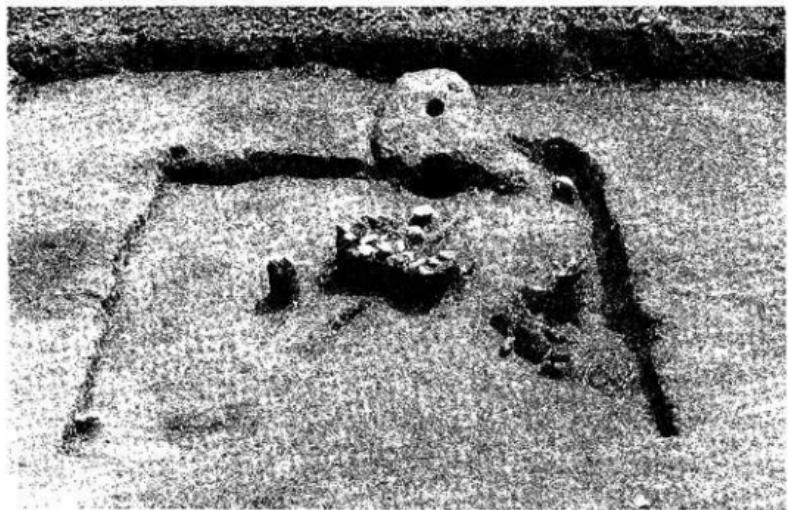


2号住居址環(L)出土状況

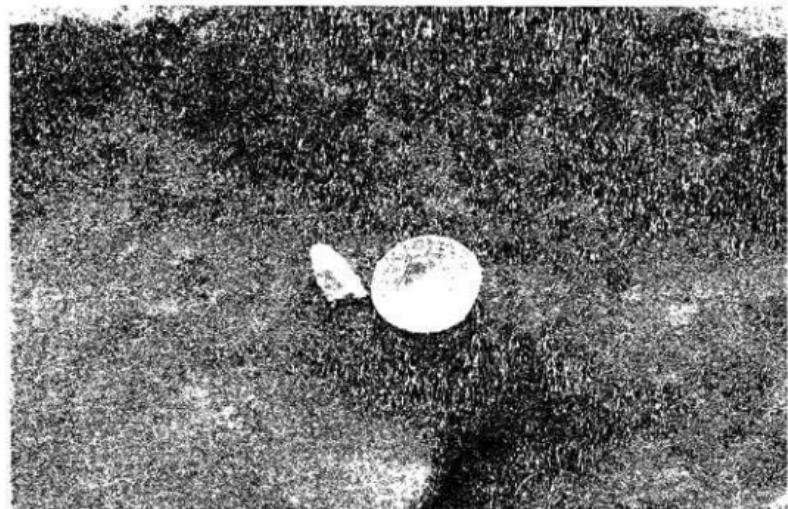


2号住居址全景

図版 5

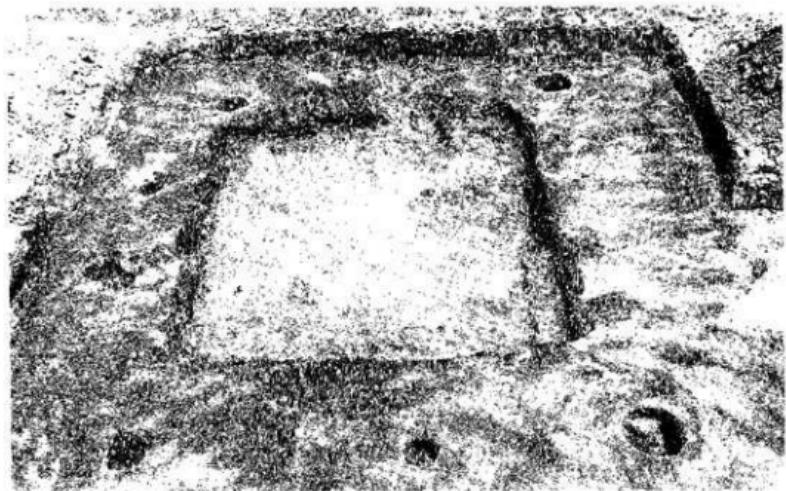


3号住居址遺物出土状況

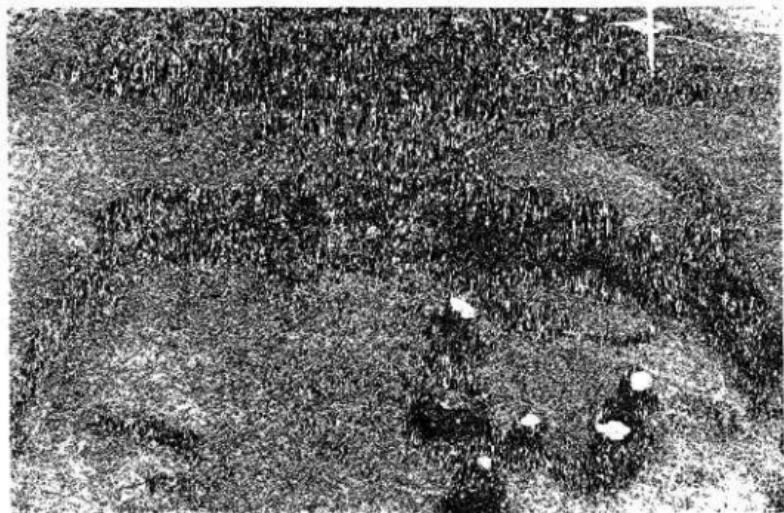


3号住居址環(h)出土状況

图版 6

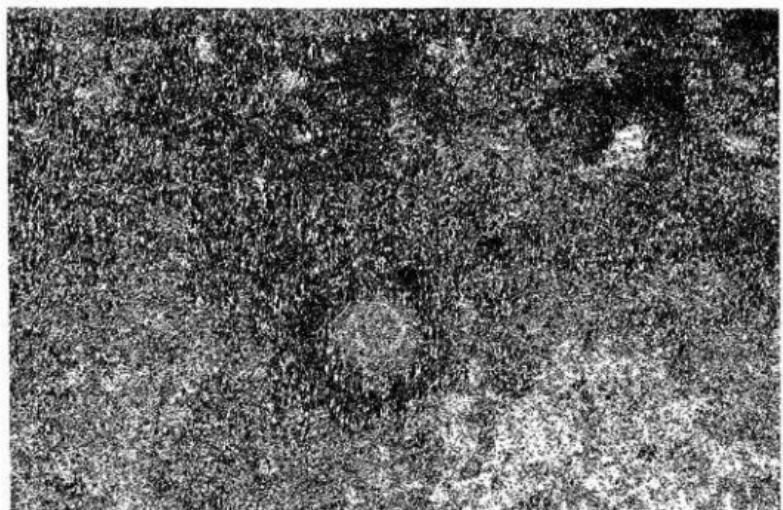


3号住居址全景

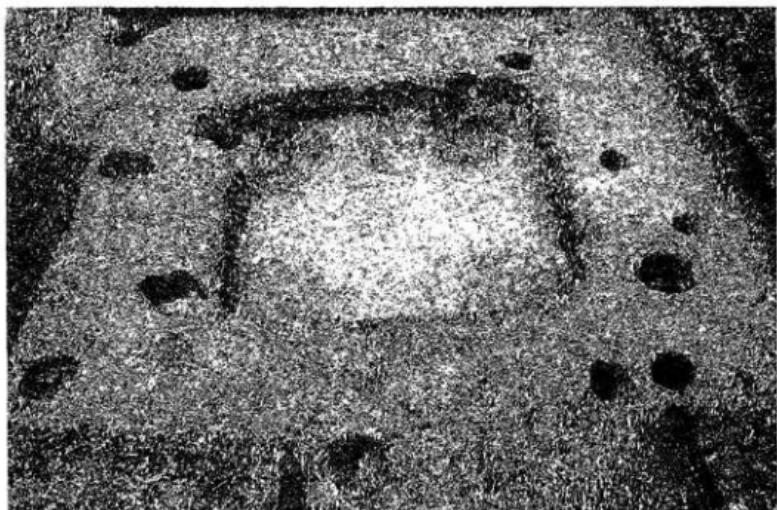


4号住居址遺物出土状況

图版 7

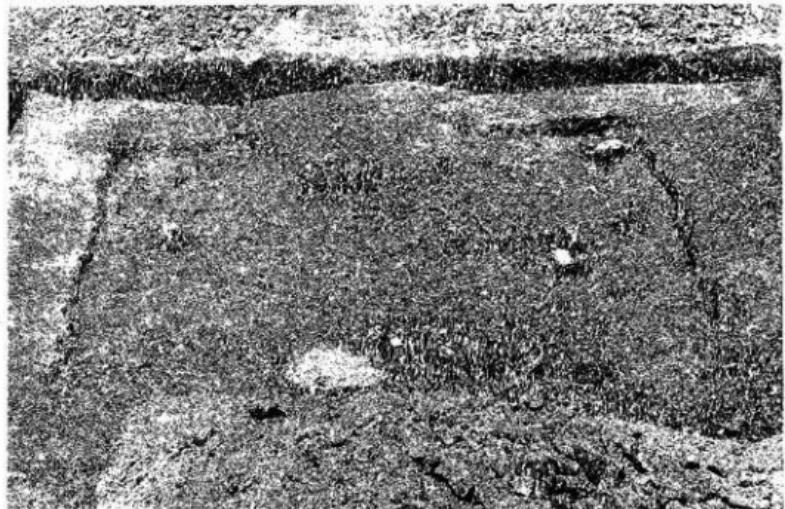


4号住居址坑a出土状况



4号住居址全景

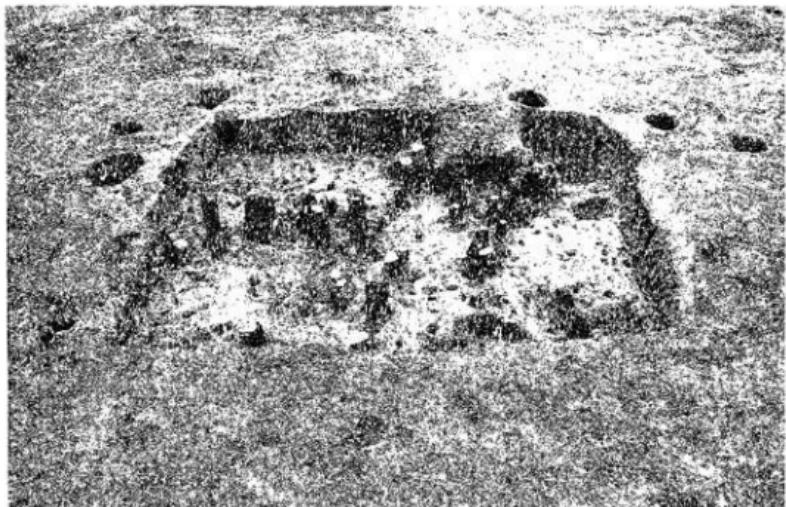
圖版 8



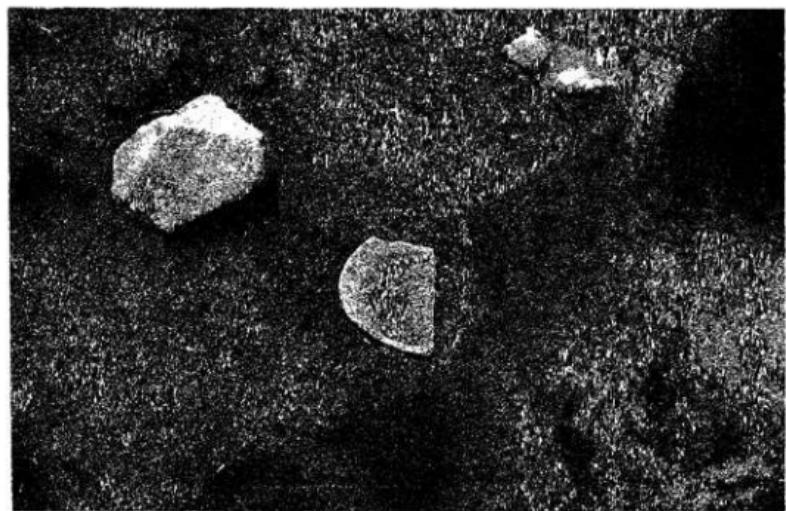
5号住居址全景



5号住居址坏出土状况



6号住居址全景



6号住居址坏出土状况

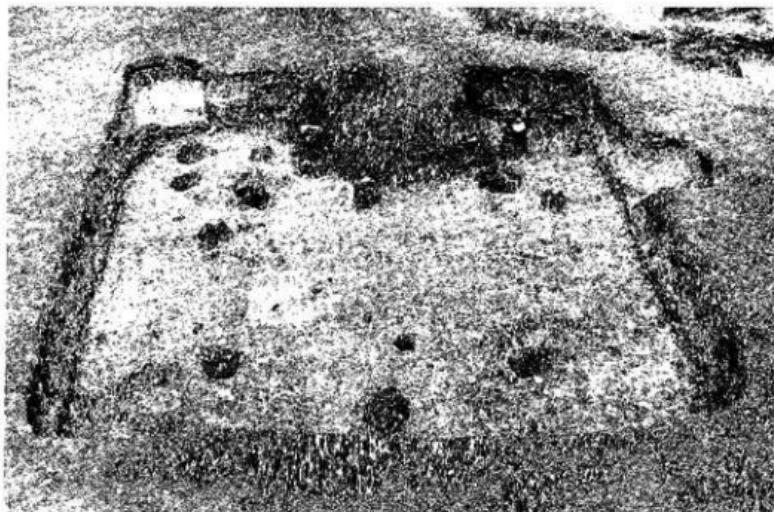
图版10



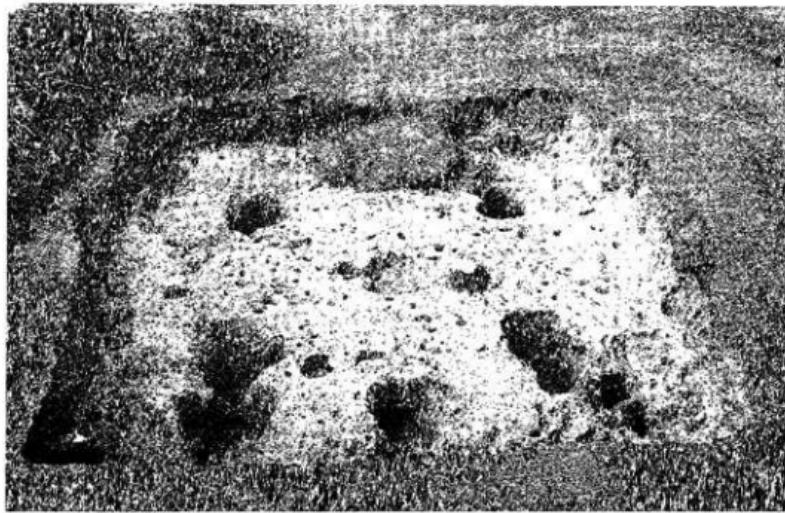
7号住居址全景



7号住居址坯及び瓦出土状況



8号住居址全景



9号住居址遺物出土状況

图版12

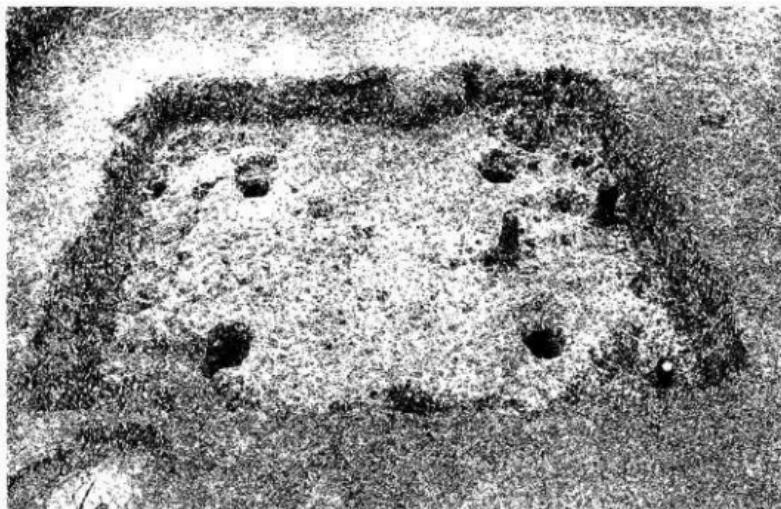


9号住居址全景

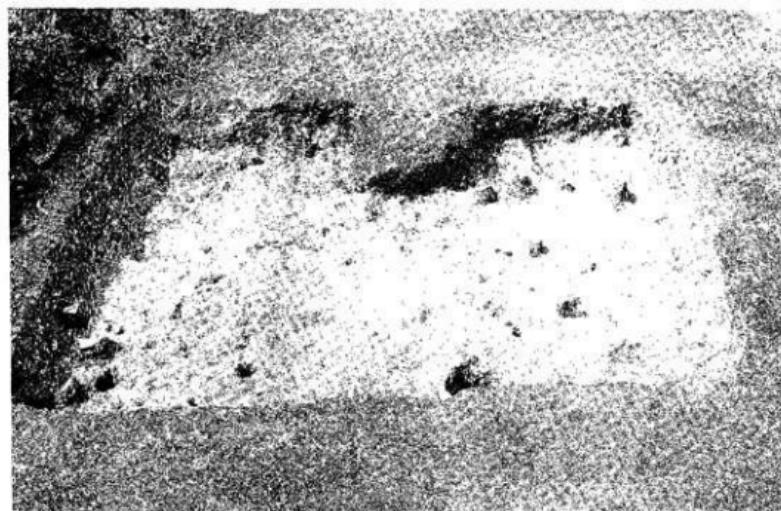


9号住居址坏出土状况

圖版13

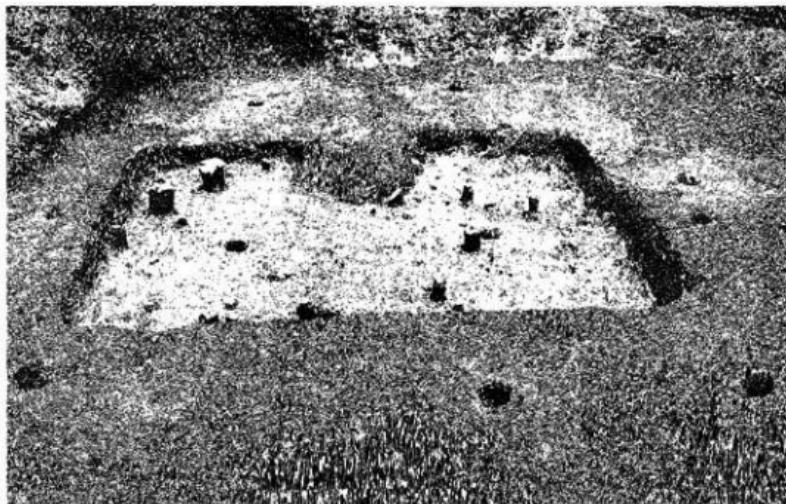


10号住居址全景

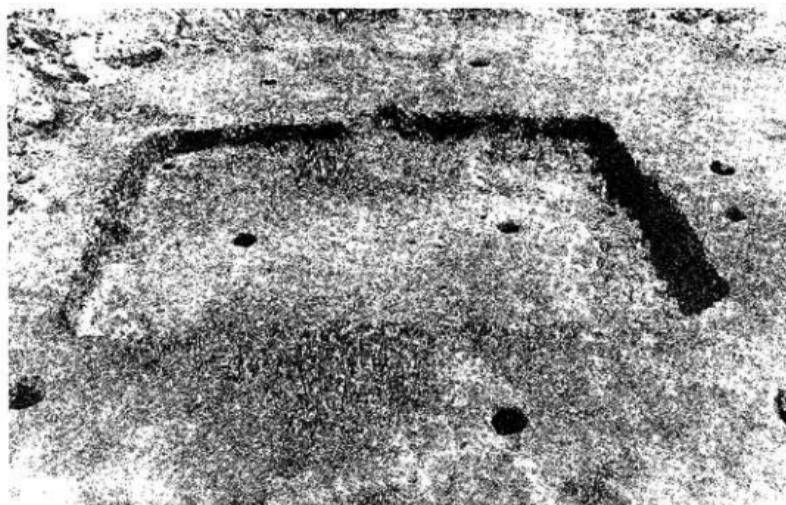


11号住居址全景

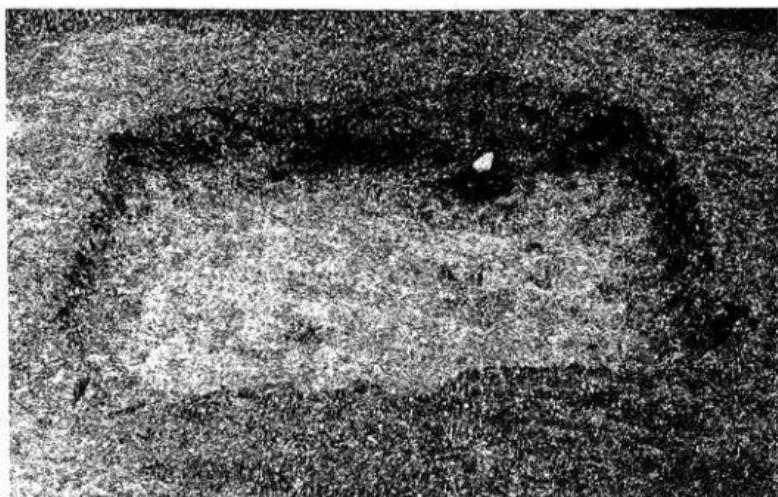
図版14



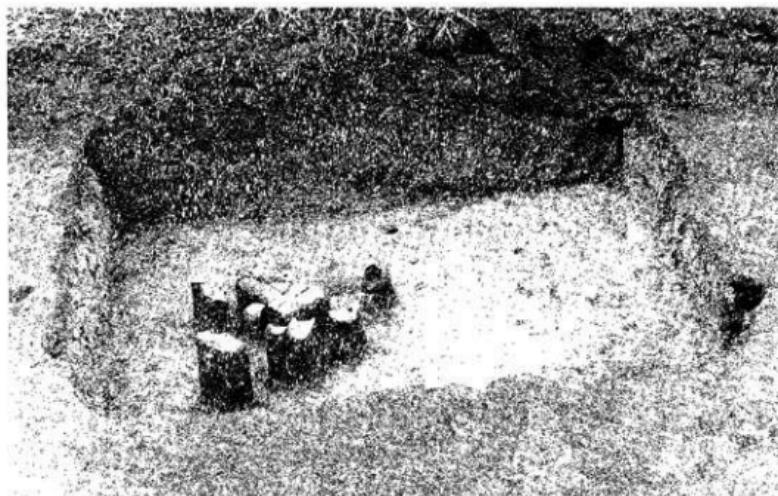
12号住居址遺物出土状況



12号住居址全景



13號住居址全景



14號住居址全景

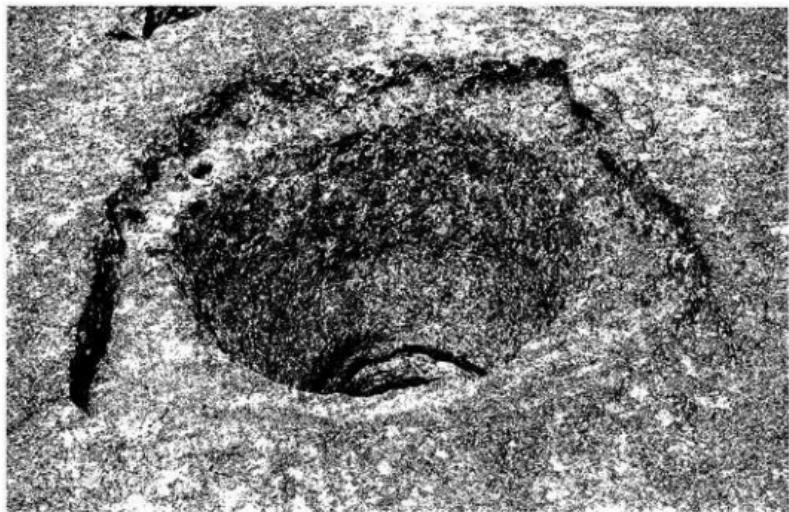
图版16



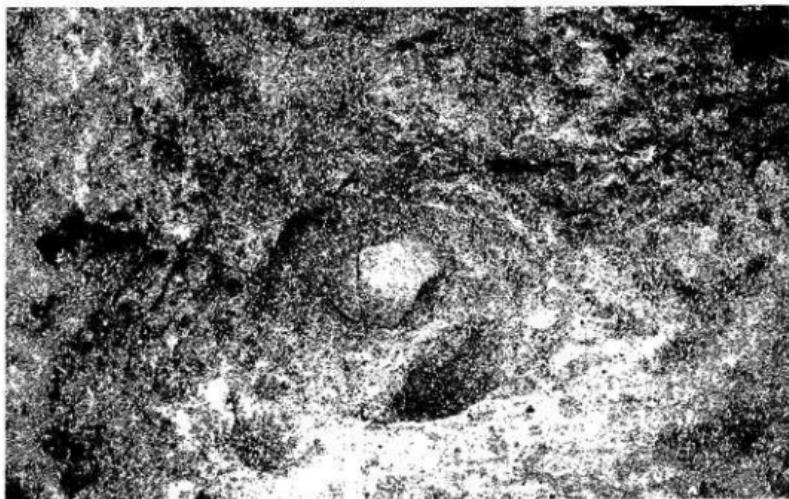
1号掘立柱建物跡



2号掘立柱建物跡

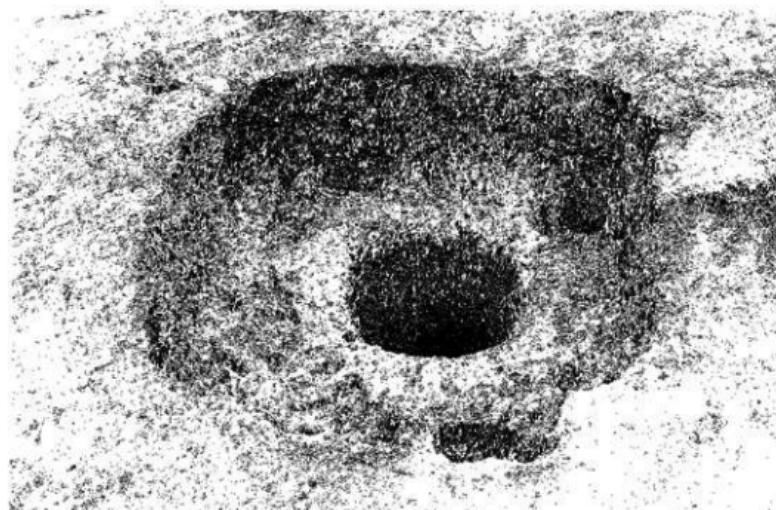


1号井戸跡全景

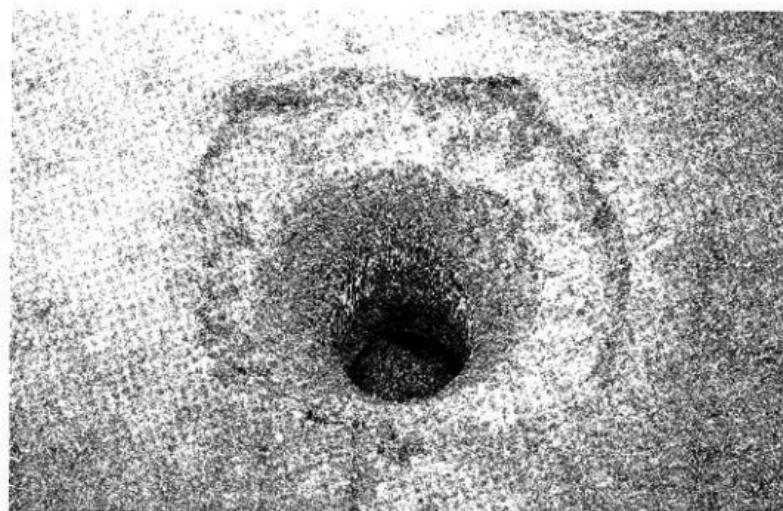


2号井戸跡遺物出土状況

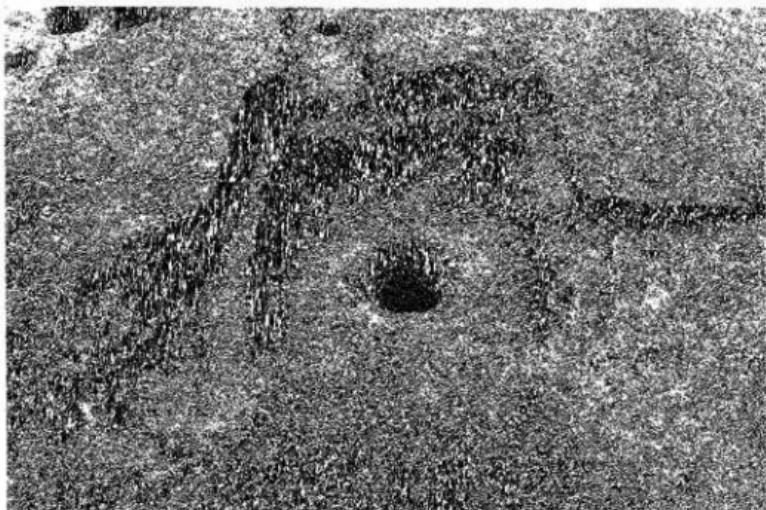
図版18



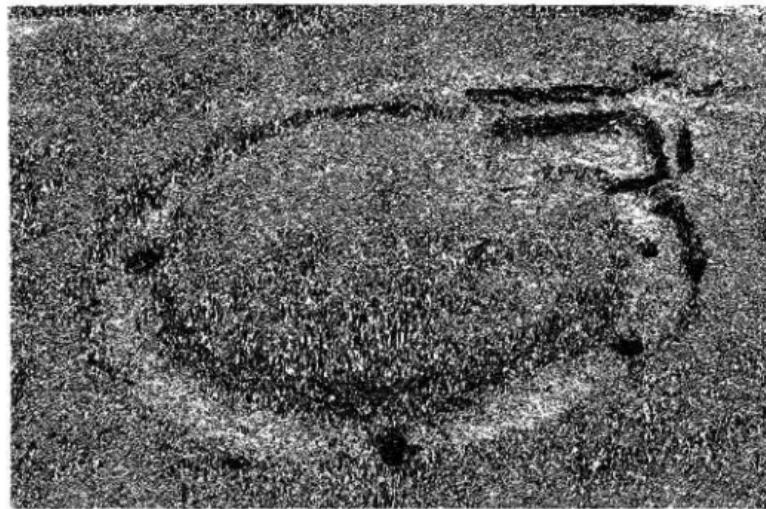
2号井戸跡全景



3号井戸跡全景

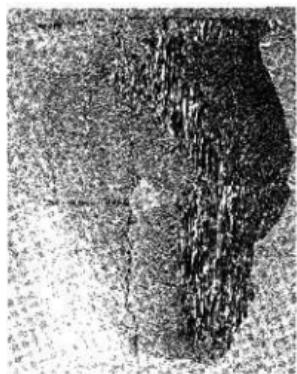


4号井戸跡全景

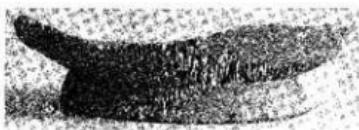


円形周溝遺構全景

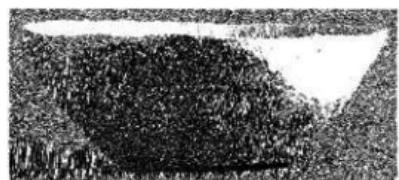
図版20



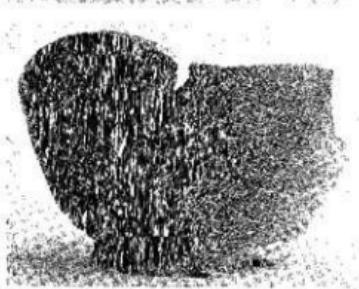
1



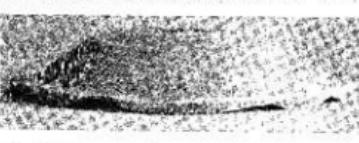
6



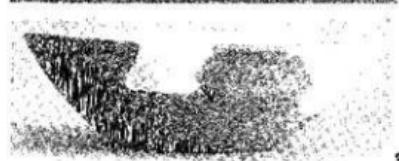
2



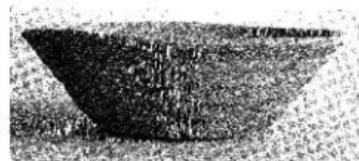
7



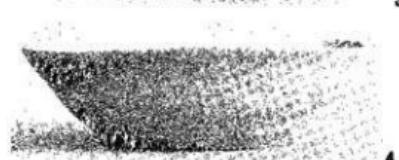
8



3



9

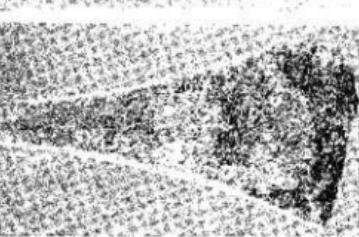


4

10



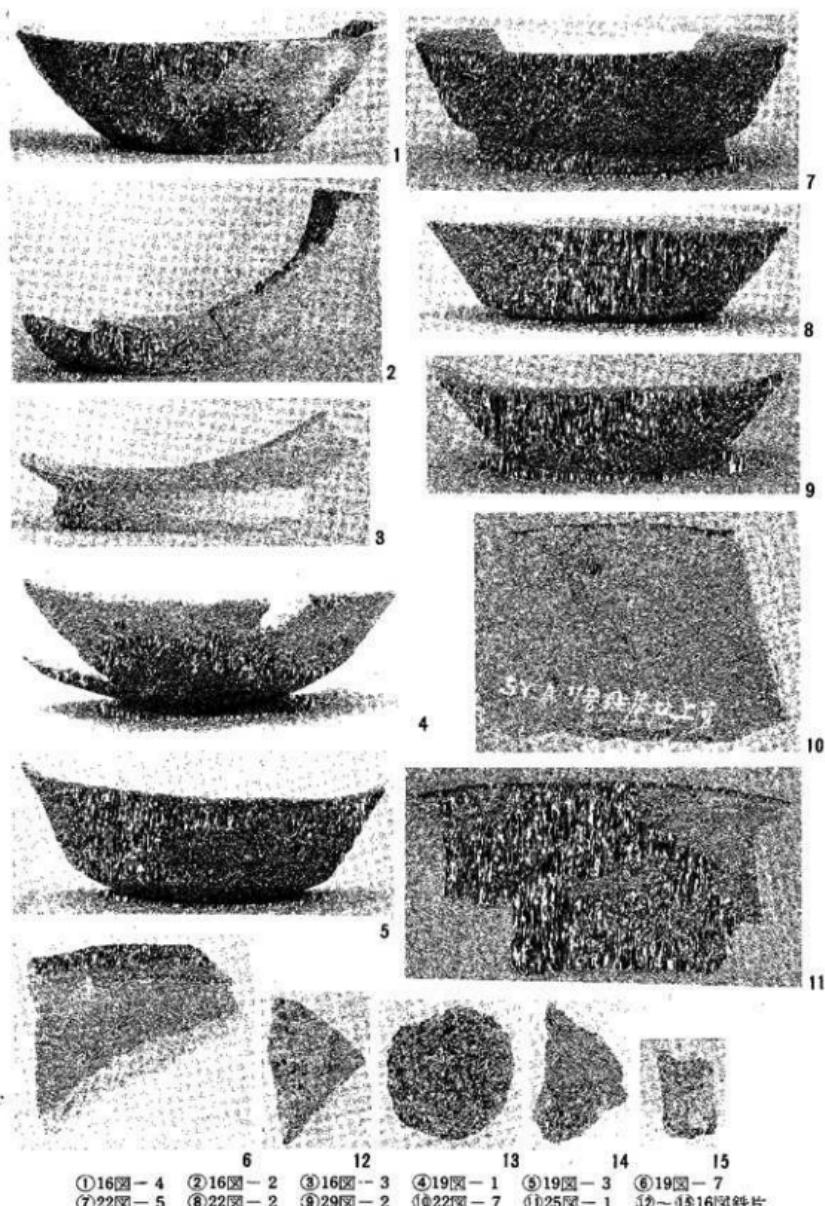
5



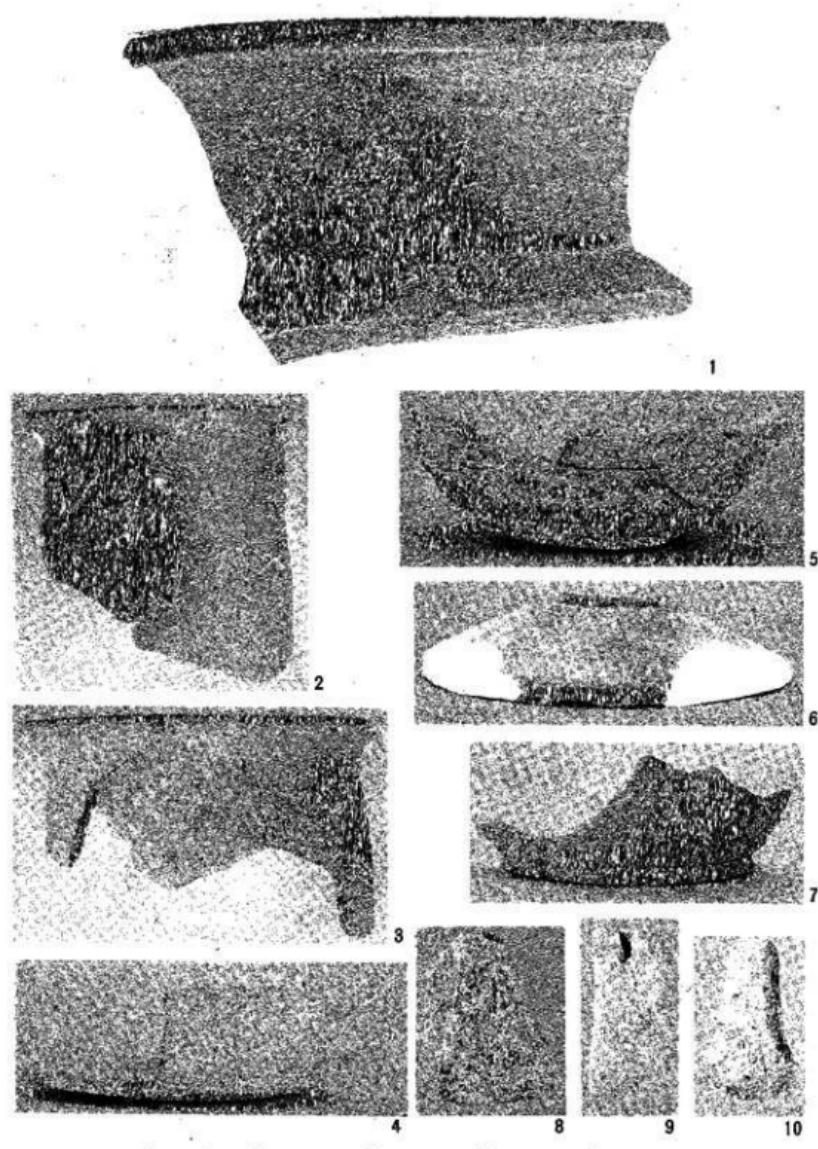
11

- ① 6図-1 ② 7図-3 ③ 7図-4 ④ 7図-6 ⑤ 7図-7 ⑥ 7図-8
⑦ 6図-2 ⑧ 7図-10 ⑨ 10図-5 ⑩ 7図-5 ⑪ 10図-4

図版21

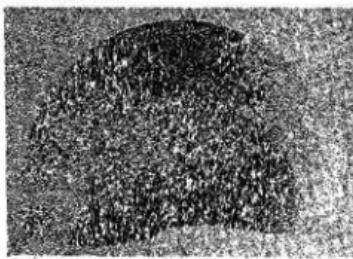
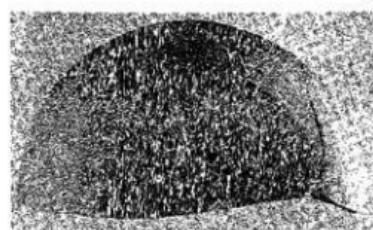
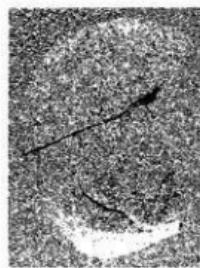
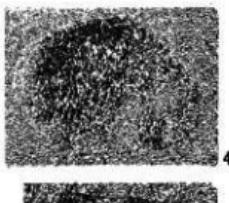
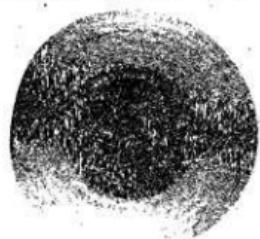
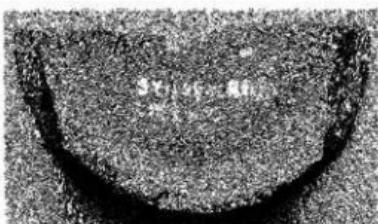
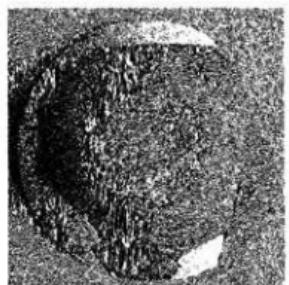


図版22



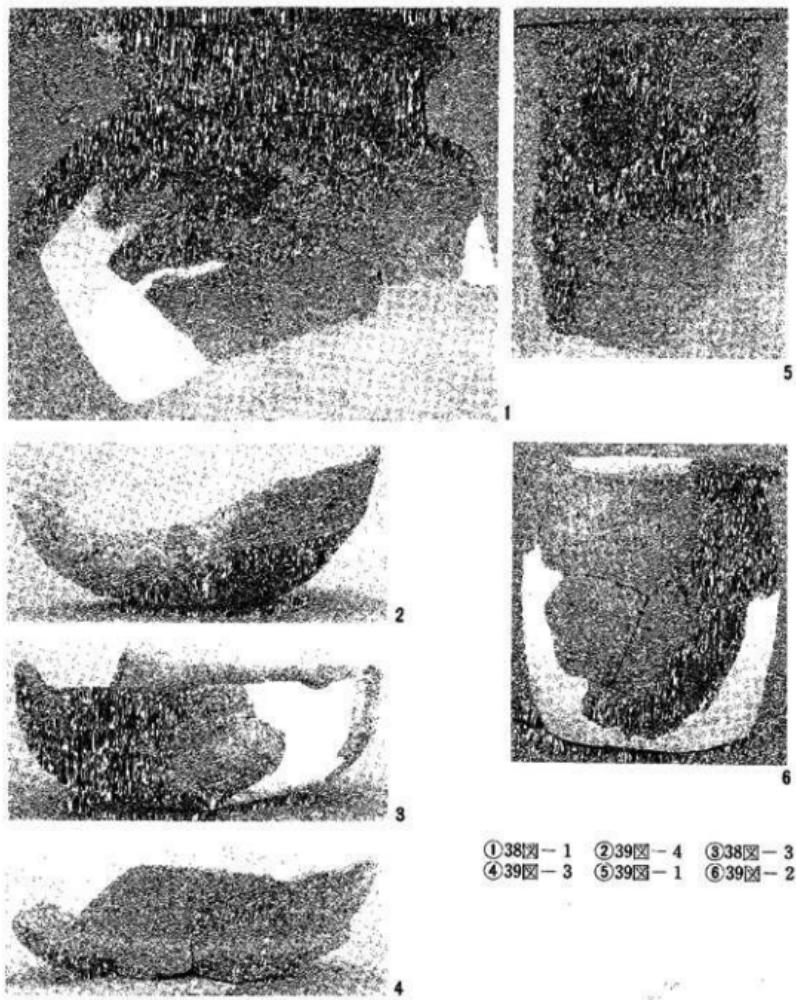
- ①22図-1 ②32図-2 ③32図-1 ④32図-4 ⑤
⑥35図-8 ⑦35図-7 ⑧35図-5 ⑨35図-9 ⑩35図-6

図版23



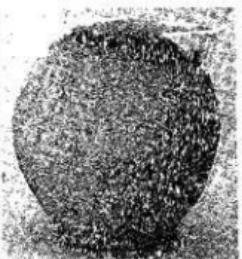
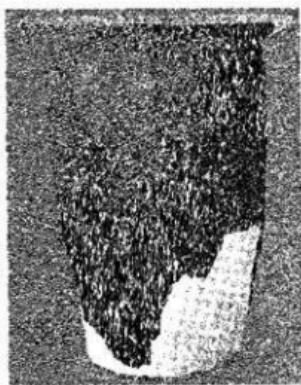
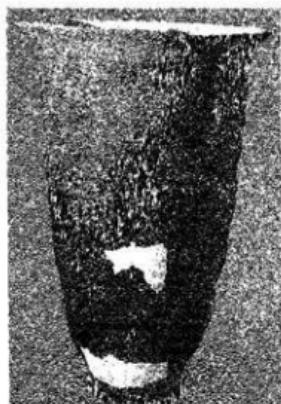
- ① 7図-4 ② 10図-2 ③ 6図-3 ④ 28図-4
⑤ 28図-5 ⑥ 28図-6 ⑦ 19図-6 ⑧ 22図-2
⑨ 29図-2

図版24



- ①38図-1 ②39図-4 ③38図-3
④39図-3 ⑤39図-1 ⑥39図-2

図版25



- ①43匁-1 ②43匁-3 ③43匁-2
④43匁-4 ⑤43匁-5 ⑥41匁-2 ⑦44匁-2

栃木県埋蔵文化財報告書 第29集
24

猿山A遺跡調査報告書

昭和53年4月1日

発行 栃木県住宅供給公社
宇都宮市戸祭2400
TEL 0286 22 0461

印刷 朝日印刷株式会社
茨城県下館市中館186
TEL 02962(4) 2575